

子どもに  
伝えたい

高森町の



子どもに伝えたい高森町の年中行事

子どもに  
伝えたい

高森町の



高森町歴史民俗資料館「時の駅」

高森町歴史民俗資料館「時の駅」





子どもに  
伝えたい

高森町の



高森町歴史民俗資料館「時の駅」





よしだ がわら  
吉田河原から揚がる連だこ



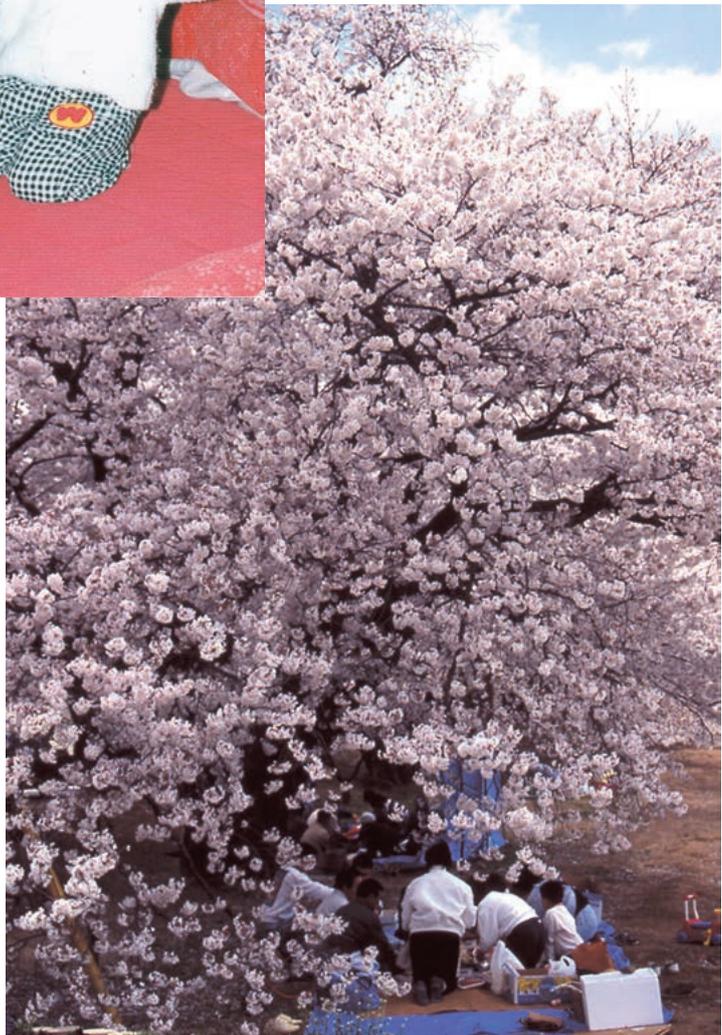
下市田保育園えんちゅう駐車場のほんやり（平成28年）



豆まき（鬼は外）



近所のお友だちとひな祭り（昭和62年3月）



満開の学校桜ざくらの下でお花見



18年前の七夕飾り<sup>かざ</sup>



盆おどり<sup>ぼん</sup> ぶきの<sup>ぶき</sup> のうりよう<sup>のうりよう</sup> 山吹区新田納涼祭にて (平成29年)



秋の収穫 しゅうかく 少なくなったハザかけの情緒 じょうちよ (平成28年)

## 『子どもに伝えたい高森町の年中行事』 目次

口絵写真	3
はじめに	10
生活の節目としての年中行事	11
<b>1 新しい年を迎える（お正月の行事）</b>	13
①正月の準備 大そうじ、ススはらい	14
門松 お松迎え、松飾り	15
オヤス、しめ縄	16
もちつき	17
②大晦日、お年取り	18
③大正月Ⅰ 元旦 若水	19
初詣	20
お茶（福茶）、歯固め	21
雑煮、屠蘇	22
④大正月Ⅱ こと始め	23
年始廻り	24
恵比寿開き	25
⑤六日年	26
⑥ほんやり（どんど焼き）の準備	26
⑦ほんやり（どんど焼き）	27
⑧七草がゆ	28
⑨鏡開き、蔵開き	29
⑩小正月 若木迎え、初山	30
もちつき	31
小正月	32
小正月の飾り物	33
鬼木（お新木）	34
あずき粥、成り木責め（柿木祝い）	35
鳥追い	36
やぶ入り	37
⑪二十日正月	38
<b>2 春を迎える（春の行事）</b>	39
①節分	40
②初午	41
③針供養	42
④天神様	43

⑤荒神祭り	44
⑥水神様の祭り	45
⑦ヤショウマ (涅槃団子)	46
⑧花祭り	47
⑨春の彼岸	48
⑩ひな祭り	49
⑪おさな開き	50
<b>3 夏を迎える (夏の行事)</b>	<b>51</b>
①端午の節句	52
②味噌炊き	53
③おさなぶり	54
④農休み	55
⑤キヌヌギ (衣替え)	56
⑥祇園祭 (津島様の祭り)	57
⑦土用の丑	58
⑧七夕まつり	59
⑨盆行事	60
迎え盆	61
送り盆、やぶ入り	62
<b>4 秋を迎える (秋の行事)</b>	<b>63</b>
①風祭り	64
②お月見	65
③秋の彼岸	66
④こぼしあげ	67
⑤神無月	68
⑥七五三	69
⑦収穫祝い (新嘗祭)	70
⑧恵比寿講	70
⑨冬至	71
⑩大祓	72
(付録) 高森町の民俗芸能	73
<b>5 資料 高森町の年中行事 (地区別表)</b>	<b>74</b>
あとがき	92

## はじめに

高森町が誕生したのは、昭和32年（1957）7月でした。町制施行60周年の記念すべき時に、『子どもに伝えたい高森町の年中行事』という冊子ができ上がりました。資料館調査委員の皆さんが調べ始めてから4年。年中行事について記された資料に当たり、各地区での聞き取り調査などを経てまとめられた冊子が、町民をはじめとして多くの皆さんにご覧いただけることになりました。

調査委員会の中で、「高森町の年中行事」を調べ始めたきっかけは、こんな話でした。「先日、地区のほんやり（どんど焼き）の準備に行き行って悲しかったことがあったんな。会場にまだ吊るされずに残って転がっていたダルマを、幾人かの男の子がサッカーのボール代わりに蹴りだしてなあ、それを大人が誰も注意をせんのかな。ダルマを何だと思っとるのかなあ。」この話から年中行事が意味していることを、もっと子どもたちに伝えていかなければということになって、この冊子作りが始まりました。

高森町の家ごとに行われている年中行事について、地区ごとにまとめられた表（資料として巻末に掲載）をもとにして、「行事の意義・いわれ」「高森町で行われている内容」「行事の移り変わり」というようなことを中心にして記述してみました。もちろん、その行事がいつ行われているかも大切です。明治6年（1873）から使われた新暦（太陽暦）の行事、新暦のひと月遅れの行事やお月見など旧暦（太陽太陰暦）の行事が混在しているのが実情です。特に、月遅れで行われてきたひな祭りや七夕などは、マスコミの影響などにより新暦でも行われることもあり、それが違和感なく受け入れられているようです。

時代によって大きく変わっていく年中行事もありますし、各家でやっている内容やそこで食べられる行事食にも違いが見られます。ですから、この本に書かれていることが高森町の年中行事の決定版とは言えません。この本をきっかけにして、年中行事の大切さに気づいてもらったり、そのあり方や意味を考え合ったりしてもらえば、ありがたいし、家ではこんなこともやっていますよ、と資料館や調査委員に教えていただければ、うれしい限りです。家ごとに伝えられてきた年中行事には、祈りや願いがこめられています。これからもその心とともに伝えていってほしいと願っています。

高森町歴史民俗資料館「時の駅」

館長 松上清志



### ダルマの話

ダルマは、むかしのえらいお坊さんがモデルとなっています。無病息災や家内安全などの願いをこめて、家庭や会社などで飾られます。1年間、家庭を見守ったダルマは、ほんやりの時に供養として燃やされます。

この本と出合う皆さんへ

## 生活の節目としての年中行事

日本の季節は、春・夏・秋・冬という変化がはっきりしており、豊かな内容も持っています。昔から人々は、この季節の変わり目やいそがしい仕事の合間に、それまでの作物の成育・豊作、自分や身の回りの人々の健康に感謝し、今後の豊作と健康を願って祈りをささげることを行ってきました。それが年中行事であり、毎年決まった日や時期に繰り返し行われるものを年中行事と呼んできました。

正月、節分、節句、七夕、お盆などは、大切な社交やいこい・楽しみの場であり、自然の恵みに感謝し、厳しい仕事に疲れた心や体を休める場でもありました。季節の節目には年中行事があり、生活のリズムをつくる大切な役目を担ってきました。

高森町は、東に雄大な山並みが天竜川をへだてて見渡せる、美しい段丘の町であり、自然の恵みが豊かで、四季の変化に富んだ町でもあります。この町に伝えられてきた年中行事の内容や意味するところを明らかにし、先人の思いがこもった行事を子どもたちにも引き継いでいってほしいとの願いのもとに一つの冊子にまとめてみました。

この本にある年中行事は、時には地域社会と深くかかわっているものもありますが、おもには各家庭で行われているものをとり上げてみました。現在も多くの家で行われている行事もある反面、昭和三十年代の頃まではあったが、今ではほとんどの家で行わなくなった行事についても調べてみました。一方、戦後、外国から入ってきて盛んに行われるようになったクリスマスなどの行事についてはここでは扱いませんでした。

子どもたちに伝えていってほしい行事を正月、春、夏、秋の順に記述してあり、この本をきっかけにして家族で年中行事について考え合ってもらい、これからも伝えていってほしいとの願いを持って作られた本です。





# むか 新しい年を迎える



「新しく迎える年が良い年でありますように」と、だれもが願います。この願いをかなえるために、一年の始まりとして元旦から1月3日にかけての大正月があり、家ごとに年神様が訪れるという考えもありました。お正月を迎えるために、大掃除、すす払い、門松飾り、もちつき、お年取りなどを行うことによって、新年を迎える気持ちが徐々に整えられていきます。

新年を迎えた大正月では、若水、初詣、歯固め、こと始め、恵比寿開きなどの行事が連続して続きます。七草がゆなどで「松の内」という一区切りを迎えた新年も、次には小正月の準備に入ります。

「百姓の正月」とも言われた小正月は、農作物の豊作を祈るものが多く、もち花やまゆ玉などの飾り物、鬼木、成り木責めなどの行事が1月15日を中心に行われます。一方、農業に携わる人が減って高森町でも小正月行事を行っている家は少なくなっています。

しかしながら、現代でも大正月・小正月を中心としたこの時期は、一年の中で年中行事が一番集中しています。年中行事を意識して過ごすことが多い時期でもあります。



# しょうがつ じゅんび 正月の準備



新しい年を迎えるために、ススはらいや大そうじを行います。また、神棚、恵比寿様、仏壇などを清め、神様にそなえる道具を洗い、床の間には主祭神や縁起の良いかけ軸などを掛けます。玄関には年神様に訪れてもらうための門松を立てます。門松には、しめ縄を張って御幣を付けます。



神棚のそうじ

いろど  
彩りのある粕汁

## 粕汁の作り方 【材料(4人分)】

- ・板酒粕…100g・塩鮭…200g
  - ・大根・里芋・ニンジン・油揚げ・こんにやく等、(頭・あら・切り身など) 季節の野菜を適量
- ①板酒粕は、あらかじめ小さく切ってぬるま湯で溶かしておく。
  - ②鮭・野菜・こんにやくを適当な大きさに切り、鍋に入れて煮る。柔らかくなったら酒粕を入れる。
  - ③鮭から出る塩気の様子を見て、味噌かしょうゆで味を整える。



## としがみさま 年神様の話

年神様は初日の出とともにやってきて、1年間その家を見守ってくれるといわれています。

年末の大そうじは、年神様を迎える準備、松飾りや鏡もちも年神様を家に迎えるためのものです。

ちなみに、年神様のいる方角は毎年変わり、恵方巻を食べるときに向く方角が年神様のいる方向とされています。

## ススはらい・大そうじ

12月中旬ごろから、竹の棒の先に笹をくり付けて、天井や軒下・外壁などの一年中たまったスス、ほこり、クモの巣などはらい、家内は、はたきやぞうきんで戸や窓を拭いて汚れを取って清めました。

昭和30年ごろまでは、家中の畳を上げ、干して叩き、床下までもぐっての大そうじをし、役場の清潔検査が行われていました。



年末すすはらい

# かど まつ 門 松

しめ縄に紙垂を付けた門松を目印にして、年神様が降りて来てくれると考えられていますので、家ごとに玄関近くに門松を立てます。

## お松迎え（門松とり、門松迎え）

松飾りの松と竹を暦のよい日、12月28日ごろに山にとりに行きました。幹の直径4～5cm位、枝の三段か五段の左右そろった2本の松と、7～8mの葉の繁った2本の竹を切って迎えます。地区によっては区山などに行って、枝ぶりの良い松を探して切ってきて、枝ぶりの良い松を探して切ってきて、良いとされた所もあります。

材料の竹は、各家に来る年神様に目立つように競って大きな竹を使いました。年神様は竹で一休みしてから家の中に入られた、というような話も伝わっています。

門松を立てるために、2～2.5m位の桧のくいを用意して皮をむいておきます。玄関または家の入口に、2本のくいを柱にして松・竹を結わえ付け、オヤスを取り付け、しめ縄をはって紙垂を付けます。



昭和60年頃の門松

松飾りについては、新年までの一夜飾りがきられ、余裕をもって新年を迎えられるよう、30日の内に飾るように言われています。



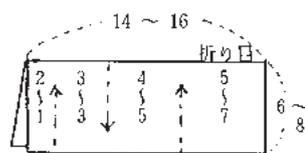
昭和30年頃の門松



平成29年の大正月の門松

### 紙垂の作り方

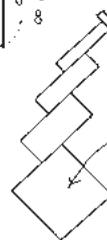
- ①1枚ごとの紙、または1枚を二つ折りにして用いる
- ②3刀4下りの御幣のつくり方



- ③下方を次々手前に折って出来上がり

下方を順次巾広にしてゆくもの

ここは正方形に近い形とする



# オヤス・しめ縄



## ④ オヤス

門松に取り付けられるわらの器であるオヤスは神々の食器と考えられ、一年中の食べ物・物資しに不自由のないように、との願いがこめられているとも言われます。オヤス・しめ縄用のワラは、丈たけの長い緑っぽいワラが好



しめ縄、松、紙垂がついたオヤス

まれます。新しい稲いなわらをすぐりそろえ、湿して柔らかくして使います。正月用なのでワラは「たたいてはいけない」との話も伝えられています。



オヤス作り

## ④ しめ縄

門松のほかに、オヤスにわら一本分の長さのしめ縄を作り、紙垂しと松を付け、蔵・作業場・長屋・外便所など母屋しの外の施設せつの戸口かどにも飾りました。

恵比寿様えびす・大黒様あまてらすおのみかみさま・天照皇大神様こうじん・荒神様さま・氏神様だがいる神棚ぶつだんや仏壇とこ・床の間はかにそなえるオヤスも用意しました。



大正月 床の間のしめ縄

## ④ 正月飾り作り教室

現在げんざい、12月に入ると、地区ごとに自治会、育成会、老人クラブなどが中心になって、小学生を対象にしてオヤス・しめ縄作り教室が開かれています。5、6年生になるとそれまでの経験けいを生かして上手にできる子もいます。

# もちつき



多くの家では、12月30日にもちつきをします。29日は「苦もち」と言って避けられました。

## ④ 高森町のもちつき

前日、もち米を洗い、その研ぎ汁を風呂に入れて入りました。男性が先に入りましたが、しっとりとなって肌荒れを防ぎ、湯冷めをしなくて風邪をひかないとも言われています。

もちつきの日は、朝暗い内から準備して5時<sup>うす</sup>ついたという家もあります。十分に水にひたしたもち米の水をきり、ふかしに入れて蒸します。蒸し上がった米を木や石の臼に入れてつきます。



ふかしたもち米を臼に入れてつき始めます。

正月につくもちには白もちが多く、一臼目はのしもち、二臼目は鏡もち用で、神々様・仏様・お宮のおそなえ用として、家族みんなで作りました。三臼目の豆もち・キビもちなどは、かま

ぼこ型にのばし、切って小判もちとして、保存食<sup>ぼん</sup>にもしました。

神様にそなえる鏡もちは、初臼<sup>はつうす</sup>といって最初<sup>うすばら</sup>についたもちから作る家と、最初は臼払い<sup>うすばら</sup>といって臼を清めるので家で食べるもちとし、二番目の臼から鏡もちを作る家がありました。おそなえもちを一番臼で作る家ではそれを戸主<sup>こしゅ</sup>がつき、その後は子どもや女性がついて切りもちとしたようです。



きね  
杵をふり上げてつきます。

鏡もちをおそなえする時については、おそなえもちを12かさね<sup>とこ</sup>ついて床の間に用意しておき、みかん、干し柿<sup>ほがき</sup>を載せて元旦<sup>たん</sup>の朝、それぞれの神様（天照大神、恵比寿様、仏様、荒神水神様、天神様）へそなえる家もあります。

# おお みそ か 大晦日 とし と お年取り

夕方早めに風呂に入り（年の湯とも言う）、お洗米・塩・鏡もち・御神酒をそなえて燈明をあげて、一年の家族の無事と収穫に感謝しました。氏神様からいただいた新しい大麻（天照皇太神宮からのお札）・氏神様・福神様（恵比寿・大黒天）のお神札を神棚にそなえている家もあります。

## お年取りの料理

家族全員がそろって一年間の健康と豊作を祈って、麦の入らない白いご飯で年取りをしました。このご飯は、一年中で一番おいしいと思えました。

年取り魚として、年に一度だけのブリが用意され、そのほかに田作り・黒豆・大根とニンジンのなます・数の子が付きました。

煮物は、大根・ニンジン・ゴボウ・サトイモ・こんにゃく・昆布・豆腐の7種類を煮込みました。この7種類に加えて、チクワやアブラゲを加えて9品の煮物を作っている家もあ

### お年取りの煮物の作り方 【材料(4人分)】

- ・大根…200g・ニンジン…100g・ゴボウ…100g
- ・里芋…100g・こんにゃく…1丁・糸昆布…1袋
- ・焼豆腐…1/2丁（普通の豆腐でも良い）
- 調味料 しょう油…大さじ3 酒…大さじ2  
みりん…大さじ1 煮干し…20尾

- ①大根は1cmのいちょう切り、ニンジンは半月、ゴボウは2cm巾に切り、里芋は2cm巾の輪切りにする。（野菜はすべてななめ切りを禁とされている）
- ②糸昆布は手早く水洗いし、焼豆腐は一口大に切る。こんにゃくは下ゆでしてから切る。
- ③鍋に豆腐を除くすべての野菜等を入れ、かぶる程度の水でゆっくり煮る。時々アクを取る。（煮干しは頭とわたを除くと味がよくなる。袋に入れるか、たこ糸でしばって入れると後で取り出しやすい）
- ④調味料を入れ、最後に豆腐を入れ、好みの味に仕上げる。



ります。

昭和30年代までは、家で飼育していたにわとりやうさぎの肉の煮つけ、鯉などを、年取り用の食べ物としていました。

お年取りの準備がすむと、戸主の音頭で乾杯して、この一年を振り返り、来るべき年の期待を述べ合いながらごちそうをいただきます。



昔からのお年取り料理

## おせちのいわれ

食べ物には、それぞれにいわれ・由来があり、「田作り」は豊作を祈り、「黒豆」は健康でまめまめしく、「ゴボウ」は元気でしっかり大地に根を張るように、「数の子」は子孫繁栄、「昆布」よろこんぶ とのこと、「きんとん」（長いも・栗）は金運を、「しぐれ煮」（貝ひも・蓮根）は見通しが良いとのこと。縁起のよい肴が食卓に並びます。

# わかみず 若水 正月元日

新しい年を迎え、最初にくむ水を若水と言います。また、初水とも言われています。

若水は、古くから神聖なもので、心身のけがれが取り除かれ、邪気を防ぎ、生命を若返らせると言われてきました。生きる力をたくわえることができる「若返りの水」だといわれています。そのために豆がらをたいてお湯をわかし、まめで暮らせるように、との願いをこめました。燃やすものは豆がらが多いですが、鬼木を使ったところもありました。



冬の不動滝（近くまで若水をくみに行った）



若水をくむ水道の飾り

若水は元旦のお茶、食事にも使うので、戸主が一番先に起きてきて、若水をくみ、豆がらなどでお湯をわかしてお茶の準備をします。家族全員が集まり新年のあいさつをして若水をわかしたお茶をいただきます。

町の水道が開設される前は、井戸・飲み水地に水神様をまつり、若水を迎えました。また、大島川上流付近の家では、不動滝の近くまで行き、若水を迎えていたと聞いています。

今は水道水を用いている家庭が多くなっているようです。

## ④ 若水迎えのつとめ

若水迎えのつとめは、戸主（一家の主人）、あるいは家中で一番若い男性というように家によって決まっています。くんだ水は神棚・仏壇におそなえし、顔を洗うのにも使います。

### 年神様を迎える

元日は福の神がおいでになるので、朝早くから戸を開けておきます。また、出ていられないようにそうじははき出しはしない。洗濯もしません。道具類は一切使わない。これらのことは、今でも多くの家で行われています。



正月元日

年の初めに神社や寺にお参りします。もともとは、戸主（家の主人）が大晦日の夜は寝ないで、年神様をお迎えする「年籠り」の慣習であったと言われていいます。これが大晦日の除夜の鐘つきと、神社・寺などへの初詣になってきたと言われます。

初詣は地元の社寺へのお参りと合わせて、新しい年の恵方（年神様の方角）にある神社にお参り（恵方参り）するのが由緒あるならわしとされています。

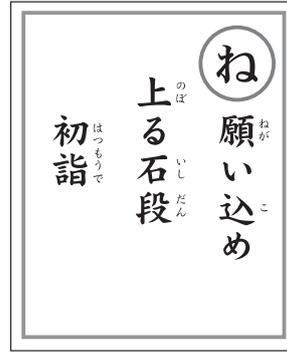
### ●高森町の初詣

除夜の鐘を聞きながら、二年詣り・初詣に出かけます。産土神・皇大神・先祖神・山神・菩提寺・お墓などを早朝までにお参りします。おそなえは大豆・洗米のおひねり・お金・オヤスなど。

神社では、お神酒・ミカンなどをいただき、お札・縁起物（重ね米俵・破魔矢・熊手・絵馬など）をお迎えします。



初日の出



「上市田 いろはカルタ」より

地区によっては、区民総出の拝礼、初日の出遙拝などが行われています。

吉田地区では、平成になって区民の多くが一緒になって、吉田山に登って初日の出を拝んでお雑煮をいただき、新年を迎える行事を続けています。また、下市田4区では「元旦マラソン」と言って、朝、集会所に集まり、初日を拝みながら2～3kmを走ります。途中、産土神の萩山神社に初詣。帰り次第、区民そろって新年祝賀会を行います。

これらは、平成の世になっての新年の迎え方で伝統行事になっています。



二年詣り（萩山神社）



二年詣り風景

# お茶 (福茶)

## はがた 正月元日

# 歯固め

### ① お茶

正月元旦の朝、若水をわかし、家族そろって、お茶（福茶）をいただきます。ところによっては「福茶」といい、梅干・昆布・いり黒豆・サンショウの実などに湯を注いでいただくといひます。

お茶は普通の煎茶を用い、家族そろって「歯固め」のものを食べながら、いただきます。お茶の用意は、男子が行う家が多いようです。かまどに豆がらで火を燃やし、ところによっては鬼木をたいて湯をわかし、火の神様に今年の用心を祈ります。今は台所の改良でかまどは見かけなくなりました。

### ② 歯固め

歯固めというのは、年の始めに初めて物を食べて歯を固めるということで行われます。

歯固めには縁起ものとして、黒豆・栗・干柿の三つを食べ、「まめでくりくり働いてかき取れるように」というわけです。特に、干し柿の種は、小判にたとえられ、種が多いほど豊作になるといわれています。

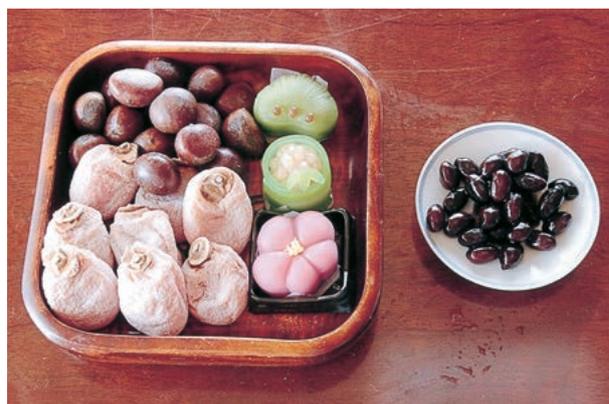
三つの食べ物に、新春の祝い菓子も添え、家族そろっていただきます。食べた干し柿の種を数えて自慢しあい、和やかな一時を過ごします。



下市田4区の元旦マラソン



山吹新田地区 元旦 総礼式



歯固めの食べ物

# ぞう に と ぞ 雑煮・屠蘇

正月元日



## ④ 雑煮

雑煮は神にそなえたものを家族が分け合っ  
て、いただいた神聖な食事が始まりと言われ  
ています。

古い時代（室町時代）には「煮雑」と言わ  
れ、数多くの具にもちを入れ、文字通りの雑  
煮の形で、正月三が日の食事であったとのこ  
とです。

元旦にお茶のあと、朝食としていただきま  
す。しょうゆ味で具材は大根・ニンジン・昆  
布・豆腐・ゴボウ・サトイモ・こんにゃくな  
どがあり、家によって独特な味を続けている  
ようです。

もちは「切りもち」を焼いて入れます。

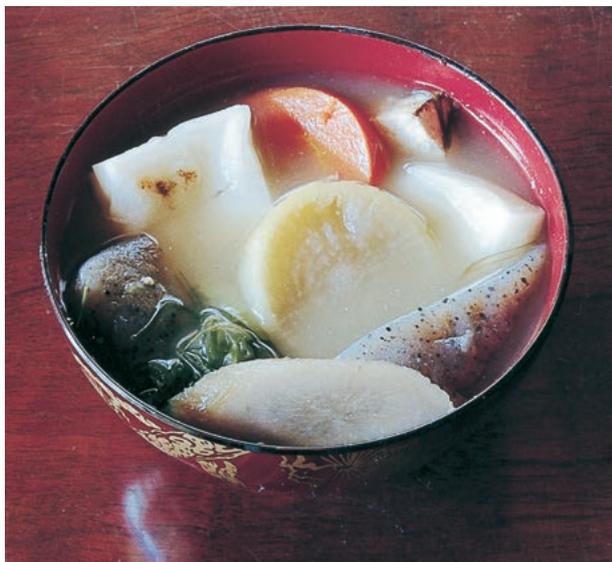
## ④ 屠蘇

年の初めに延命長寿を願って、いただく漢  
方薬酒です。平安時代に中国から伝わった宮  
中の儀式が始まりと言われています。

屠蘇は家族そろっていただき、子どもも飲  
むことができ、一年間の災厄を払うと言われ  
ています。

屠蘇の中味は、サンショウ・肉桂・ショウ  
ガ・そのほかの薬草で、これらでできた「屠  
蘇散」が薬局などで売られていました。

今では御神酒をいただき、日本酒で祝杯と  
する家庭が多くなっているようです。この祝  
杯には、黒豆・大根とニンジンのなます・田  
作り・数の子・昆布巻きなどをいただきます。



お正月の雑煮



屠蘇をいただく料理

# はじ こと始め 1月2日



元日は何事もせず、新年を祝います。2日が「こと始め」の日。普段の仕事を儀式としてだけ行います。一年間を見通しての予祝であり、この予祝の行事は正月に多く、特に1月2日に集中して行われてきました。

**すり初め** 山芋を擦り味付けし「とろろ汁」にし、ご飯にかけ、焼きイワシを添えていただきます。  
(胃腸を整え、滋養強壮)

**初荷出荷** 初めての荷。一年の商売繁盛を願って、にぎやかにいきます。

**仕事始め** 農家では、わらじ・草履・荷縄・福縄、鯛(恵比寿開きのおそなえ)を作ります。農機具の手入れ、切り初め(剪定作業)

**縫い初め** 女の人が初めて針を持って、縫いものをします。

**書き初め** 毛筆で習字、書いた清書は「ほんやり」のとき納めます。

**買い初め** 朝早くから近くの商店や飯田町(現在の飯田市)へ出かけます。「福袋」が楽しみ。新年始めて、お金を使います。

**初湯** 新年初であるので、最初に神様仏様に入っていただきます。

**初夢** 宝船の絵に「長き世の遠の眠りの皆目覚め波乗り船の音の良きかな」の回文の歌(逆から読んでも同音の歌)を書いて枕の下に敷いて寝ると、いい初夢が見られると言われています。



すり初めの料理



書き初め

## とろろ汁の作り方

【材料(4人分)】

- ・長芋…400~500g
- ・だし汁(2カップ)  
水…2カップ しょう油…大さじ5~6  
煮干し…適宜(または昆布、かつお節) 味の素…少々
- ・卵…1個・砂糖…大さじ2・青のり…少々
- ①長芋をすり鉢ですりおろし、すりこぎでよくする。
- ②卵を割り込み、さらにする。(好みによって砂糖を入れる)
- ③②をだし汁でのばしていく。この時、だし汁があまり熱いと芋が切れてしまうので、冷まし、(50℃くらいが丁度よい)少しずつ入れながらよくすり合わせる。
- ④出来上がったとろろ汁を御飯にかけて、青のり(焦げないようによく炒ってもむ)をのせる。

### 【作り方のコツ・応用】

- ・だし汁は濃いめの味にし、よいだしを取る。
- ・お椀に盛って、もみ青のりや、さらしねぎなど添えてもよい。



## なべ借り(1月2日)

上市田のある家では、初嫁さんが実家に帰って、なべを借りて料理を作り、親にごちそうする習慣があったそうです。

山吹のある家でも同じようなことを二十日正月に行っていたそうです。

ねん し まわ  
年始廻り

正月三が日にあいさつに伺うことを「お年始」といい、そのときの手土産を「お年賀」といいます。

お年始のあいさつが直接できないときは、「年賀状」を送ります。年賀状のあいさつは、松の内までに行うものとされてきました。

本来、お年始は一族の人達が大晦日に本家や親元に集まって、「年ごもり」をして、新年を迎えることであつたといわれています。

今は三が日のうちに、お寺さん・神主さん・



なごうど 仲人さん・親戚・お世話になっている方のお宅にあいさつに行きます。

手土産は、のしもち・するめ・障子紙・風呂敷・そのほか迎春に相応しい品物などです。

近ごろは、本家へのあいさつを親戚のみならず一緒になって、料理店などで行うとか、仲人さんへの仲人子たちの年始もそろって店で行うなどが多くなっています。

また、となり近所へのあいさつも組・常会で集まって新年会を行っているなど、年始のあいさつは、形を変えてきているようです。

女の人（主婦）は、正月三が日は大変忙しく、年始のあいさつに出かけることはできなかったもので、小正月・女正月・二十日正月に実家・お世話になっている家などにあいさつを行っています。



年賀状



お年始に集まった親戚

# 恵比寿開き

1月3日

(おいべす開き)

恵比寿・大黒天をまつる正月行事です。

恵比寿は事代主命ことしろぬしのみこと（大国主命の息子）と同神。大黒天は大国主命おおくにぬしのみことと習合し、二神一対にしんいつついで福神を代表して人気があり、多くの家庭に祀まつられ親しまれています。

## まつり方

恵比寿・大黒天をお迎えむかえます。

オズサあさ（麻を細かく裂いたもの）を神棚だなに飾り付けます。（長寿祈願）

鯛たい（福繩なわ）・丸扇子せん・白米・切りもち・二年参りにねんまゐりでのお迎えのお札などをそなえます。

おそなえのご飯は赤飯で、一つの膳ぜんに二組のご飯とハマグリのお汁、イワシのお頭付きを向い腹はら合わせあはせに2尾を盛りそなえます。

また、一升しやうますに家族みんなの手持ちのお金さいふ、財布さいふ、預金通帳よきんとうちやうなどを全部入れ、おそなえしてご利益りやくを祈いのります。

小豆あずきご飯、白米、切りもち、イワシ、二年詣まいりのお札などをそなえます。恵比寿・大黒天は「恵比寿大黒」というセットで呼ばれ、農業や商売はんじやうの神様として親ほしまれています。ご利益としては、商売はんじやう繁盛ほう・豊作ほう・家庭繁栄などが言われています。



しょうふくえんぎもの  
招福縁起物「恵比寿・大黒天」



恵比寿・大黒天をまつった神棚

# むい か どし 六日年 1月6日

## ほとけさま (仏様の年取り)

翌日を七日正月と言い、その前日の6日を「年越し」の日としました。元日から続いてきた大正月の行事の終わる日、つまり「松の内」(各家で飾った門松や松飾りを外すまで

の期間)の最後の日として祝われてきました。

仏の年取りとも言われます。「馬の年越し」とか「牛の年越し」など、人間以外のものが年をとるのを祝うところもあります。

年末の年取りにならっておそなえをし、年取りをします。朝の行事で、なにがしかのごちそう(正月の残り物など)を食べます。

この日で大正月は終わり、朝食の後、門松やしめ縄など大正月の飾りを下ろします。

# ほんやりの準備

## や (どんど焼き) 1月6日

朝から子どもたちが家々を回って、下ろしておいた門松や正月の飾り物、神様のお札、ダルマなどを集めてきて、広場や田んぼなどでほんやりのおんべを作ります。

大人の人たちが採って来てくれたご神木や幣束を取り付ける長い竹などを中心に据えて、その周りに集めてきた松や竹や飾り物などを取り付けて縄で巻きながら作っていきます。

### 少し昔は？

昔は常会などの今より小さい地域単位で、道路の四つ辻や道祖神のような石造物のある所などに、子ども(男子)が中心になって作っていました。近くに竹やむしろなどで小屋を作り、その中でもちを焼いて食べたりしながら、おんべがほかの地区の子どもたちに壊されたりしないように、泊まり込んで番をしました。

昭和50年代に入り、道路が舗装されたり、近くに家などがあって消防法で許可にならないことなどで、安全な水田などで行うようになりました。



ほんやりの準備 (平成29年) (下市田)



昭和23年頃の追分のほんやり

# ほんやり 1月7日 (どんど焼き)

時期的におとろえている太陽の熱と光の復活を願うものとか、この火で正月の神様を送る、また厄ばらいの火祭りなどの説があります。

この行事の名称の「ほんやり」はホーヤレ(「それやれ」の意味の悪い厄を追い払うはやしことば)から、また、「どんど」は爆竹の音や火の勢いを形容する「どんどん」などからついたなどの説があります。

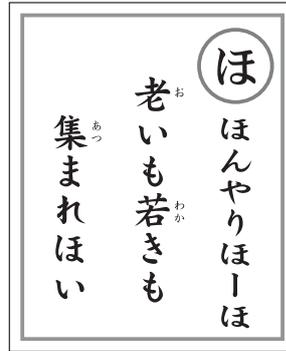
## ●ほんやりの歌

早朝子どもたちは「ホーホホーホ ホンヤリホーホ モチヤキコイヨ」「ホーホホーホ ホンヤリホーホ ホンヤリドノハオンバカデ(ガ) イズモノクニ ヨーバレテ アトデエ(家) ヲ ヤーカレタ」などと大声で叫びながら地区を回って知らせます。大勢の人が集まるとおんべに点火します。

火や煙にあたり、そこで焼いたもちを食べると夏病みしないとか一年中病気をしない、書初めに書いた習字を火の中に投げ込んで、高く舞い上がると字が上手になる、燃え残りの松などの端を持ち帰って家の屋根に投げ上



おもち、焼けたかな？(下市田)



「上市田 いろはカルタ」より

げておくと火事にならない、などの言い伝えがあります。

焼いたもちはその場で食べたり、家に持ち帰って七草がゆに入れて食べます。

厄年の人は茶碗にお金を入れておんべに投げつけて逃げてきます。そして茶碗が割れると厄が取れるとしていたところもあります。



下市田保育園の  
駐車場にて



大正時代、ほんやり様は1月14日に行われた(出砂原)

# 七草がゆ 1月7日



七日正月の行事で、早春の初春に芽を出した若草の生命力を身につけ、一年を健康で過ごせるようにと祈り、七草を粥に入れて食べます。

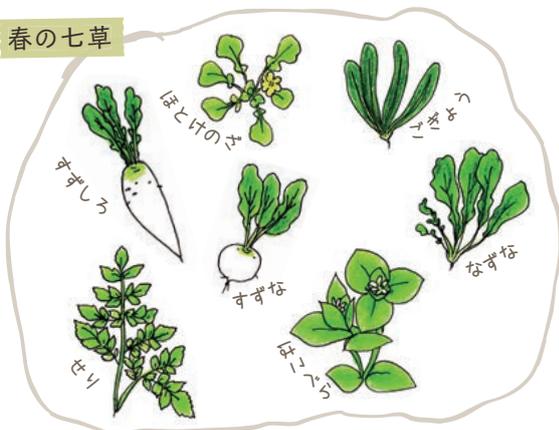
正月のごちそうで疲れた胃腸を休め、野菜で栄養をとるとも言われています。

また、七草を刻む時はやし歌にあるように、農産物に害を与える鳥を追い払うための「鳥追い」の行事が一緒になったという説もあります。

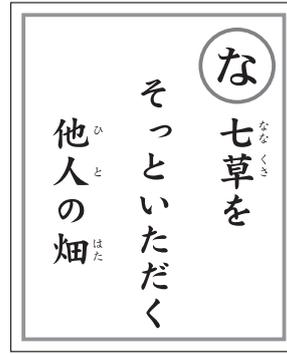
## 粥の作り方

前日の夜に神棚や床の間の前で、その日に摘んできた七草（セリ、ナズナ、ゴギョウ、ハコベラ、ホトケノザ、スズナ、スズシロ）を、まな板の上で二つの包丁でたたいて、「七草ナズナ 唐土の鳥が 日本の国に渡らぬ先に あわせてバタバタ」などとはやし歌を唱えながら刻みます。7日の朝食にその刻んだ七草とほんやりで焼いたもちを粥に入れて食

春の七草



1月7日の朝、1年の無病息災を願って食べられる七草がゆ。春の七草を入れて作ります。



「上市田 いろはカルタ」より

べます。また、七草を全部そろえるのは容易ではないので、ホウレンソウとか冬菜など他の野菜も代用されているようです。

## 七草のうた



### 七草の主な効用

- セリ  
血圧降下、利尿止血、目くらみ緩和、糖尿病、癌予防等
- ナズナ  
利尿、解熱、血圧降下、視力改善、免疫力向上等
- ゴギョウ（母子草）  
咳を治め痰を切る、抗糖尿病
- ハコベラ（はこべ）  
越年草の野草で、白色の花を持つ。歯槽膿漏予防、利尿、健胃、母乳出良
- ホトケノザ  
（おにたびらこ…シノ科のホトケノザとは別）  
胃潰瘍予防、血圧降下、筋肉や打撲痛解消、四肢の痺れに効く
- スズシロ（大根）  
消化促進、免疫力向上、コレステロール低下、壊血症に効果
- スズナ（かぶ）  
スズシロに似た効果

※唐土とは、昔、日本で中国を呼んだ呼び名です。

かがみ びら

鏡開き

くら びら

蔵開き

1月11日



### ④ 鏡開き（おそなえ開き）

大正月に神棚や床の間にそなえたおそなえ（鏡もち）を下げてきて、刃物で切ることはしないで、手または槌で割って、お雑煮やお汁粉にして食べます。これを食べると一年中病気にならないといわれます。硬くなったおそなえを食べることで歯を丈夫にするという説もあります。

「開き」という言葉は「割り」という言葉の持つ良くない連想を避けるための言い方です。

### ④ 蔵開き

「蔵開き」というのは、商家ではこの日に市が立つので、今まで閉じていた蔵を開き、農家でも土蔵や物置の戸を開け、そこへもちなどをそなえて、作業始めを祝う意味があるようです。



おそなえ（上）と鏡開きされたもち（下）



土蔵の戸が開かれた蔵

# わかぎむか 若木迎え 1月12日

## はつやま 初山

### ◎若木迎え

小正月の行事に使う種々の祝い木（鬼木用  
にヌルデなど火に会わない木、まゆ玉用のツ  
ゲやビンカなど）を山から切ってくる行事。  
（若木迎え）



ソヨゴ迎え

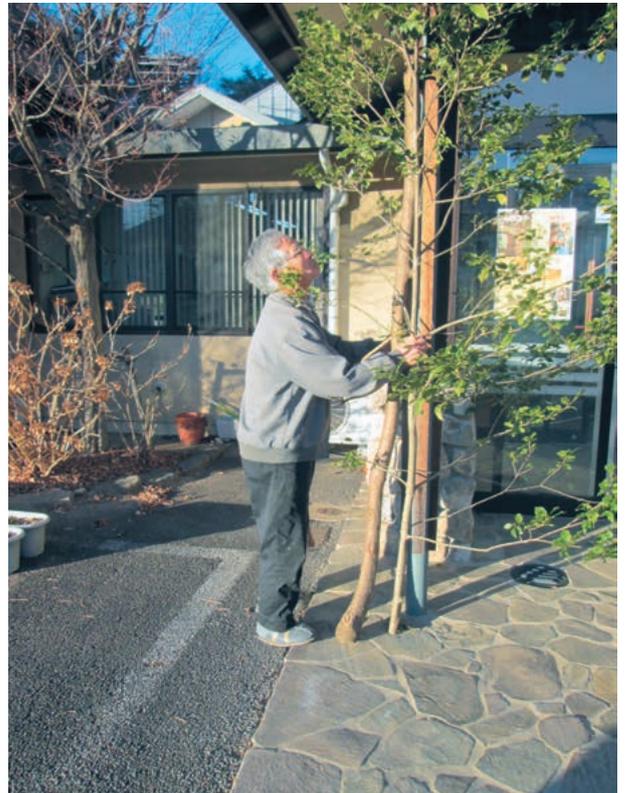


竹迎え

### ◎初山（おやまもうし）

昔は1月中に一年分のたきぎ（ガスや灯油  
が使われるようになるまで煮炊きや風呂の燃  
料として使われていた）を採り、蓄えていま  
ました。山での仕事始めの行事でもあり、一年  
間の山仕事（たきぎとりなど）の無事などを  
山の神に祈る行事。（初山入り）

この二つの行事が兼ねて行われているよう  
です。



若木迎え

（山から迎えてきた木を大事にすえて置きます）

# もちつき 1月13日



小正月飾り<sup>かざり</sup>を作るためにもちをつきます。

そのもちには2種類あります。

2種類のもちとは、精米<sup>せい</sup>したもち米<sup>む</sup>を蒸<sup>む</sup>して、臼<sup>うす</sup>に蒸<sup>む</sup>し上がったもち米<sup>む</sup>を入れ、杵<sup>きね</sup>でついて作るつきもちと、米<sup>む</sup>を石臼<sup>うす</sup>でひいた粉<sup>こな</sup>に湯<sup>か</sup>を加えて練<sup>ね</sup>る粉もち<sup>こなもち</sup>があります。

小正月の飾り物<sup>かざりもの</sup>のもち花<sup>もちばな</sup>は、つきもちで作り、まゆ玉<sup>まゆたまご</sup>は、粉もち<sup>こなもち</sup>で作ります。



まゆ玉作り



「ペッタン」という音がしてきそうです。

## 現代のもちつき

昭和50年代頃<sup>ころ</sup>から、家庭電器製品<sup>せい</sup>の電動もちつき機<sup>き</sup>が各家庭<sup>ご</sup>に入るようになり、臼<sup>うす</sup>と杵<sup>きね</sup>でもちをつく家庭<sup>ご</sup>は高森町<sup>げん</sup>でも減少<sup>げん</sup>していますが、今でも臼<sup>うす</sup>と杵<sup>きね</sup>でもちをついている家<sup>ご</sup>があります。

### 豆もちの作り方

#### 【材料】

- ・うるち米…4カップ
- ・もち米…6カップ
- ・大豆…1カップ
- ・塩…少々



- ①米を洗い、一日くらい水に浸しておく。
- ②大豆を洗って、①の米と一緒に蒸す。
- ③蒸し上がった米に塩をふりかけて、もちをつく。
- ④もちがつけたら、小判型にのす。
- ⑤0.5~1cmくらいの厚さに切る。

#### 【作り方のコツ・応用】

- ・大豆の代わりに、くるみ、青のり、落花生を入れてもおいしい。

### 思い出

父親が力強く杵<sup>きね</sup>を振り上げて、もちをつく姿を見て、早く自分もあの様にもちをつけるようになりたいと願ったものでした。

また、つき上がって湯気<sup>ゆげ</sup>が立っている熱々のもちをほう張った時の口の中の感触、今でも思い出されます。

こしょうがつ  
小正月

1月13・14・15日



1月1日を大正月というのに対し、1月15日を小正月と言います。

小正月は、女正月とされています、女性は、暮れから大正月は忙しく立ち働いたので、<sup>つか</sup>疲れた体を休ませるといった意味合いがあると思われま。昔はお嫁さんが里帰りをしました。

また、小正月は百姓の正月とも言い、<sup>こう</sup>農耕にかかわる<sup>ほう</sup>豊作を祈る行事が多くあります。「お物飾り」と言われるいろいろの飾り物を作ります。

高森町で作られている「お物飾り」は、もち花、<sup>あわぼ</sup>粟穂、まゆ玉があります。

また、そのほかの行事では、

- 1 鬼木を作り、一年の<sup>ほうきょう</sup>豊凶を占う。
- 2 あずき<sup>がゆ</sup>粥で一年の吉凶を占う。
- 3 鳥追い
- 4 成り木<sup>なきぜめ</sup>責め

があります。これらの行事は次ページ以降に詳しく掲載してあります。

もち花やまゆ玉を、竹やコナシかソゴ、ビンカ<sup>\*</sup>の木に<sup>さ</sup>刺し<sup>だわら</sup>米俵に立て、まゆ玉は皿に積み上げてお膳<sup>ぜん</sup>に載せ、米俵の前に置きました。



小正月の神棚

1月14日は、道具を休める日ということで<sup>しよく</sup>職人や農家が一切の仕事をしない地区があり、翌日の15日の朝、もちや小豆(あずき)の入った粥を食べる家がありました。

やく  
厄落とし

<sup>きょう</sup>興味深い例として、昭和40年頃まで行われていたものですが、上市田地区では、1月13日の夜から14日の朝にかけ、<sup>やくどし\*</sup>厄年の男女が13日の夜暗いうちに家を<sup>ぬ</sup>抜け出て、自分の年の数だけのお金あるいは大根の輪切りにした物を、今まで使っていた茶碗と一緒に村の四つ<sup>つじ</sup>辻へ<sup>す</sup>投げ捨てる。その際絶対に<sup>さいぜつ</sup>振り返らない事、もし振り返ったり他人に見られたりすると厄は落ちない、という行事がありました。

※注

コナシ：小梨、バラ科、リンゴ<sup>ぞく</sup>属、エゾリンゴとも言う。赤い実<sup>な</sup>がなる。

ソゴ：モチノ木科、<sup>じょうせい</sup>常緑性高木、秋に赤い実がなる。

ビンカ：キョウチクトウ科、夏から秋に花壇<sup>だん</sup>や鉢<sup>はち</sup>植えに見られる。

厄年：男は25歳、42歳、61歳

女は19歳、33歳、37歳、61歳



小正月の飾り アワンボー（粟穂）

# 小正月の飾り物 かざもの 1月13日～16日



小正月の飾り物には、もち花、粟穂あわぼとまゆ玉がありますが、もち花や粟穂は、たわわに実る稲穂いなほや粟穂を意味し、まゆ玉は、養蚕さんの時代にまゆがたくさん取れるように、という願いが込められています。

正月飾りや小正月飾りは、神様をお迎えして、神様の御加護ごごをいただき、五穀ごこくが豊作で、家内安全であるようお願いする気持ちの表れです。

**もち花**：ついたもちを小さくサイコロ状に、四角に切って作ります。

**粟穂**：粟もを模したヌルデもの小枝を竹の枝の先につけました。

**まゆ玉**：米あを洗らって乾かわかし石臼うすでひき、その粉を水で練りまゆの形に作ります。

でき上がったもち花、粟穂やまゆ玉を竹やコナシかソヨゴ、ピンカの木きに刺さし米俵だわらに立て、まゆ玉は皿せんに積み上げてお膳のに載せ、米俵の前に置きました。

また、養蚕という産業がほぼ無くなるとともに、米作重要の時代から会社等の勤めつとの収入しゅうが主体と



粉にする石臼

なるにつれ、小正月行事がほとんど行われなくなりました。それでも数軒けんの家では今でも行っています。

※注

粟：雑穀ざっこく、五穀ごこくのうちの一つで、稲いねから取れるお米は貴重であり、米の代用としました。

五穀：米、麦、粟あわ、豆、キビまた又はヒエ



とこ 床の間の小正月飾り (昭和60年頃)



小正月お物飾り (昭和25年)



小正月飾りのもち花まゆ玉の飾り

# おにぎ 鬼木

1月15日  
にぎ (お新木)

まだ新年でなく、今年の内かと鬼に迷わせるといふ魔よけの意味があります。家によっては、12月の内に翌一年間分のたくたきぎができていと神様に報告するように考えて行っています。また、「お新木」とも言います。



鬼木がそなえられた小正月飾り

鬼木の製作は、山から迎えたねむの木やヌルデの木の若木を長さ50cm位に切って半分わかに割れた面に墨で12本線を引きます。また割った木の表面に十二月と書く家もあります。

でき上がった大きな鬼木は、門松のくいの下しばに縛り付け、小さい鬼木はもち花やまゆ玉

## 鬼木の大きさ

- 鬼木・大 松かねむの木を使用  
長さ 50cm位  
太さ 直径10cm位 半分に割る
- 小 ヌルデの木  
長さ 10~15cm位  
太さ 親指位 半分に割る



鬼木作り

とともに笹竹の先に刺します。家によっては、ヌルデの木で小さい鬼木を作り、神棚、氏神やお墓はかにそなえていて、旅行の折には出発前に鬼木を燃やし、旅行中の事故を避ける事としています。

## 鬼木への祈り

現在では、非科学的な行事と思われがちですが、古来日本人は山や木に神や精霊せいれいが宿ると信じてきました。

また、米をはじめとした農作物が不作の場合には一家の収入減しゅうにゅうげんになってしまい、更に何らかの自然災害によって凶作となれば、一家全員の死に直結してしまいます。この行事もそのような農民の信仰しんこうとも言えましょう。

時代の移り変わりとともに行われなくなりましたが、僅かわずですが続けている家もあります。

### ※注

ヌルデ:ウルシ科、落葉高木、ウルシほどでないが、かぶれることもある。

ねむの木: マメ科の落葉高木、高さ10~15mほどに成長します。河原など水のある場所に自生し、非常に美しい花を咲かせます。漢字では合歡木あはれぎと書きます。

# あずき粥 がゆ 1月15日



あずき粥を食べることにより一年の邪氣を払う意味合いがあります。また、その年の吉凶や天候、農作物の作柄を占い、米や蚕の豊作を祈る行事です。

## あずき粥への祈り

1月15日の朝、小豆に米や小さいもちを入れて炊いた粥を食べます。ある地区では、粥を吹いて食べると大風が吹くと言われること

# 成り木責め な き ぜ



かきのきいわ

(柿木祝い)

1月15日

農作物の豊作を祈る多種多様な小正月行事の一つです。



柿の豊作を願う「成り木責め」  
(飯田市上郷黒田で)  
〔南信州〕新聞平成29年1月21日掲載

果樹をたたいたり、傷つけたりして、その年の豊作を約束させる行為で、柿木祝いと呼ぶ地区もありますが、いずれにしても木の霊にその年の豊作を願う行事です。



から、風害を逃れるために粥が熱くても吹かずに食べました。また、他の地区では、18日の朝に食べるにより毒虫に刺されないとも言われておりました。

時代の移り変わりとともに、この行事も次第に見られなくなりましたが、若干ながら行っている家もあります。

## 演劇性のある行事

寒い時期、畑であったりして、大変な行事です。

二人で行うことが多いです。先の人が鉈か斧を持って「成るか、成らぬか、成らねば木を切るぞ」と唱え、2度3度木の幹を切り、傷つけます。木魂の代わりにもう一人が「成ります、成ります」と答えます。

その後、朝作ったあずき粥を果樹の切り口に塗りました。

今年もしっかり豊作になりますようにと願います。

## 移り変わり

主に昭和三十年代頃までは行われていたが、農業技術の向上、農薬や肥料の普及により、次第に行われなくなりました。

ただ最近では小正月の風物詩としてJ Aみなみ信州農協でイベントとして行っています。

# 鳥追い

1月15日

小正月の行事の一つです。農作物を食い荒らす害鳥を追いはらい、豊作を祈願する行事です。

## ●鳥追いのようす

ある地区では、ヌルデの木で竹ぼうきのような物を作り地面をたたき、他の人が拍子木（ひょうしぎ）をたたき、五穀の鳥を呼び歩きました。

歌詞は次のようです。

「阿波の鳥ホウホ、吉備の鳥もホウホ」

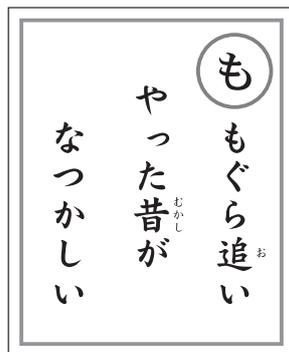
阿波は現在の徳島県、吉備は岡山県ですが、五穀の内の粟、黍を意味していると思われます。

農家が作物の豊作を願う切なる気持ちが歌詞に込められていることがわかります。

時代の移り変わりとともに、今ではほとんど行われていません。



拍子木（資料館蔵）



「上市田 いろはカルタ」より

## ●「上市田いろはカルタ」解説書より

モグラ追いは小正月の一連の行事の一部です。小正月の14日は、朝ほんやりの後で鳥追いの行事というのがありました。男の子ども達が拍子木を叩きながら地区の耕地を廻って歩きました。

先ず大將が大きな声で「稲の鳥もホーホ」というと、ほかの子ども達が声をそろえて「稲の鳥もホーホ」という。続いて「麦の鳥もホーホ」というと「麦の鳥もホーホ」と、言い「粟の鳥もホーホ」「黍の鳥もホーホ」「豆の鳥もホーホ」と五穀の鳥を呼びながら歩いた。

また、15日には成り木責めもありました。

モグラ追いはやはり15日に天秤桶（てんびんおけ）を畑へ持ち出して、桶の縁を天秤棒（ふち）でギイギイとこすって厭（いや）な音を出して、もぐらがこぬようにという、なんとも素朴（そぼく）な行事でした。

※注

五穀：米、麦、粟（あわ）、豆、キビ又はヒエ



阿智村春日の七久里地区に伝わる鳥追いホーホ  
（「南信州」新聞 平成29年1月13日掲載）

# やぶ入り 1月16日



1月16日は地獄の閻魔大王が亡者を責めたり、いたぶるのを止める日です。地獄のふたが開いて、餓鬼や死者の魂が地獄からこの世に戻ってくる日です。

そこで、各地の閻魔堂や、十王堂の開帳が行われ、縁日が立つようになりました。実家が遠方の奉公人は帰省できないため、縁日で購入物や芝居見物を楽しむようになりました。

本来は奉公人ではなく、嫁が実家へ帰る日だったとされていたのが、商家の習慣に転じたようです。

しかしながら、太平洋戦争後、労働基準法ができ、日曜日を休日とするようになり、やぶ入りの行事はすたれ、正月休みや盆休みに統合されるようになりました。

「やぶ入り」の語義は、やぶ深い故郷へ帰るとい説と、宿入りからの言葉の変化という説があります。



元旦あるいは1月4、5日を女正月と言ったのがこれに該当すると思われます。料理をする女性は、年末から正月は大変忙しいので、この日を休ませる日としたものです。

昔の一般の人にとっては、多忙な正月行事の一段落の休息日でした。今では正月や小正月を盛大に祝うことが少なくなり、改めて休日とする家庭は少なくなりましたが、家庭によっては主婦をねぎらう意味で、女性を休ませています。



牛牧の十王堂



十王堂内の閻魔大王

# 二十日正月 1月20日



正月20日のことで、正月の祝い納めとしてもちや正月料理を食べ尽くしたり、飾り物を納めたりする日です。

全ての正月行事がこの日で終了します。昔、嫁さんが里帰りしたのもこの日でした。

## もち花やまゆ玉を食べる

飾り物のもち花、まゆ玉等をおろし、もち花は焼いたり炒ったりして食べ、またまゆ玉はおまゆ練りと言って小豆を煮てつぶし、その中へまゆ玉を入れ汁粉にして食べました。

現在ではもち花やまゆ玉という小正月飾りを作る家が少なくなりましたが、今も続けている家があります。

## 鬼木占い

鬼木占いと言って囲炉裏で鬼木を燃やし、12個並べたその炭で今年の月別の天候を占ったりする家もありました。

鬼木占いは、囲炉裏自体が今では全く見られないので、この行事は無くなってしまったと思われます。



揚げたもち花



おまゆ練り



もち花ははずす子どもたち

# むか 春を迎える



こよみの上では、2月初めの立春の前日が、冬と春の季節を分ける日となり、冬が終わる日を節分といいます。まだ寒さが残る季節ですが、春の息吹ふきを感じて生き物が動き出します。この自然とのかかわりで春の年中行事が行われます。

この時期には、高森町でも高森南小学校の学校桜ざくらや瑠璃寺の枝垂れ桜るりしだなど、華やかな花の季節を迎えます。これに合わせるかのように、米作りの準備じゅんび、野菜の種まきじゅ、果樹の消毒作業かくなどの農作業も本格化します。

春の年中行事としては、節分に始まり、初午はつうま、天神様・荒神こう・水神の祭り、その後ヤショウマや花祭り、春の彼岸ひという仏教的行事ぶつが続き、4月に入って月遅れのひな祭りおくがあり、豊作を祈るおさな開きほうさく いのが行われます。



# せつ ぶん 節 分

「節分」は季節の移り変わるとき、すなわち、立春、立夏、立秋、立冬の前夜のこと、この地方では旧暦立春についてのみいわれています。一年中の厄はらい、魔よけをして年神様を迎える行事です。

種まきのできる季節に備えて、氏神・農耕神をまつり、無病息災と五穀豊穰を祈願して冬の陰気をはらい、春の陽を迎えます。



神棚にそなえられた福ます

## ④ 豆まきと魔よけ

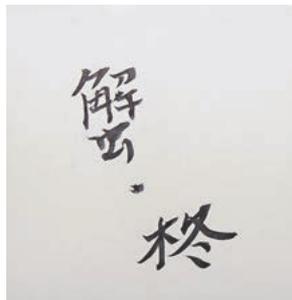
高森では（多くの家で）5センチ四方の白い紙に「かに・かや」「蟹・柊」と書いて玄関や戸口など出入り口に貼ります。

鬼はにおいのあるものやトゲのあるものをきらうので、本来ならイワシの頭を柊の枝にさして魔よけとして出入り口につるします。

大島山ではわらの筒の中へコショウ、頭の毛、ニンニクなどの強いにおいのするものを入れて焼き、魔よけとした家もありました。

夕方になると、大豆を鍋で炒って、一升ますに入れて神棚にそなえ、家族でお年とりをします。

ますの豆を上座敷から戸主（一家の主人）



「かに・ひいらぎ」と書かれた紙 ひいらぎの枝にさしたイワシの頭



豆を力いっぱいまきます

が戸や窓をいっぱい開けて「鬼は外 福は内、福は内」と大声で豆をまきます。そして、よその鬼が入ってこないように終わったらすぐに戸・窓を閉めました。

その後、一年間健康で過ごせるようにと家族で自分の年の数だけ豆をとって食べ、残った豆は神棚にそなえておき、初雷が鳴った時に食べると落雷の難から逃れられると伝えられています。

下市田では、夕飯は白飯に煮物豆腐ものなどの料理にイワシ頭付きを食べた家もありました。大島山では、白飯に五色か七色のものを入れた汁を作って年取りをした家もありました。

### 恵方巻

最近、「恵方巻寿司」を食べる家も増えてきました。恵方というのは、年神様が訪れるという大吉の方角です。関西方面から入ってきた風習で、家族で同じ作りの巻きずしを恵方を向いて食べるというものです。

# はつ 初 午

「節分」から数えて初めての午の日を「初午」と呼んでいます。稲荷神社の祭り、または蚕玉様の祭りともいわれて、信仰している方たちは集まって祭りをしていました。

## ⑩ 稲荷神社のお祭

この日は、馬を引いて近くの観音さまや稲荷様に参詣した方々も多かったようです。

初午ということで、下市田で馬に対してもヒエを煮て食べさせ、健康で労働に耐えるようにと願ったり、馬につける馬具を新しく作って農繁期の準備をしたりする農家もありました。

この日は各地で稲荷神社の祭事を行い、ご飯を炊き、揚げ豆腐などをそなえ、みんなでお参りをしました。初午もうでは縁起がよいとされ、福もうでともいわれていました。

必ずしも稲荷神社の祭りとは限らず、春の農事の前に豊作を祈る祭りとして全国で行われていました。



ぶき 山吹 中島のお稲荷様

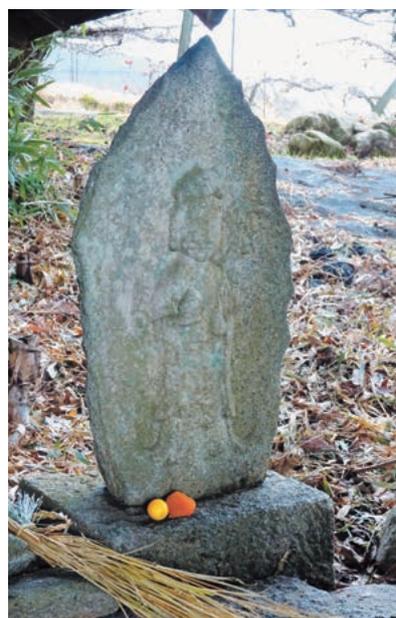


## ⑩ 蚕玉様のお祭

養蚕の盛んだったころ、蚕玉様の祭りは高森では下市田・上市田・大島山・山吹などで行われていました。朝早く青葉をたいてけむりを出し、このけむりに乗ってくるといわれる蚕玉様をお迎えしました。正月の門松でたご飯で牡丹もちを作って蚕玉様にそなえ、家族でいただきました。

また、周り番に当たった人は5人～7人くらいで地区を回り白米とお神酒・銭（応分の喜捨）を集め、米を粉にして投げもちを作ります。そして当番がもちを投げたり、蚕玉社の前で老若男女が集まりお神酒をいただいたりと大変にぎやかなお祭りでした。

この近くでは、昔、2月の最初の午の日、



山吹 北林の蚕玉様

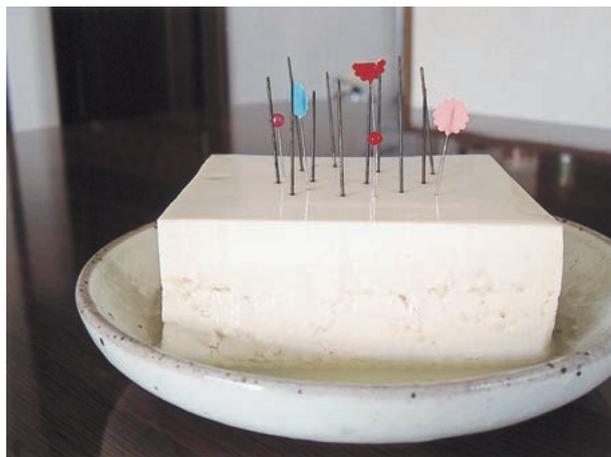
松川町新井の馬坂で初午祭りがあり、若い人たちが参拝を兼ねて遊びに出かけて大変にぎやかだったといえます。

# はりくよう 針供養

2月8日は針供養をする日でした。この日は、針を清めたり折れた針、曲がった針を集め、豆腐やこんにゃく、大根にさして神棚にそなえました。そして、ごちそうを作り、家族、友達と仕事を休んで楽しんだのです。女性にとっては年間唯一の休養日でした。

江戸時代には年の暮れに針供養といって、古い針を家ごとに集めてお金をもらっていた人もいました。

昔は機械物がなく、裁縫をするのに、針と握りばさみと糸しかありませんでした。針仕事は女性の仕事として農閑期や雨天の日、冬仕事、夜なべにしていました。一年中お世話になった針ですが、曲がったり折れたりしてしまいます。そうした針をこんにゃくや豆腐にさして、ご苦労様でしたと感謝したのです。



豆腐にさした針



針供養に集まったお年寄り



上市田区民会館で（札所）供養を再現しました

# 天神様

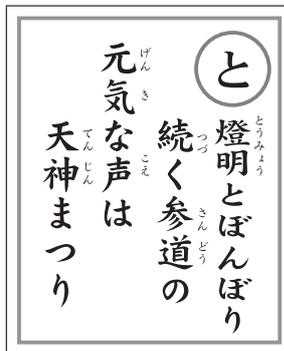
天神様というのは菅原道真公（845～903）のことです。菅原道真は平安時代の学者で政治家です。宇多天皇、醍醐天皇に仕え蔵人頭、大納言を経て、藤原氏以外では異例の右大臣にまで上り詰めましたが、左大臣藤原時平の讒言（他人を陥れるため、在りもしないことを目上の人に告げ、その人を悪く言う）で大宰府の太宰権帥に左遷されてしまいます。死後、北野天満宮に奉られます。



吉田地区の天神様の祭り

## 子どもたちのキオイ

学問の神様である天神様のお祭りは2月24日で、この祭りは子どもたちだけで自主的にやっていました。お宮の庭には、くいを何本も立てて縄を張って参道を作り、くいには自分で描いた絵の行燈をかけてローソクで灯りをともしました。子どもたちは、地区ごとに決められた道をお宮の天神様まで「天神様の歌」を歌いながらキオイ行進しました。お宮の祠の前に整列して、大將より祭りのいわれを聞き、天神様の歌の指導を受け、全員で歌いました。歌を歌い終わると、今度は「南



「上市田 いろはカルタ」より



無天神宮、南無天満ざい、ざいざい」と、これをだんだん早く7回言って行事は終わりました。

### 『天神様の歌』（上市田地区）

天神様という方は  
御名は菅原道真公  
学問深く徳高く  
君に忠義の心厚く  
時の大臣時平の  
そねみを受けて九州に  
流されたれど天皇を  
いささか恨みたてまつらず

吉田地区では、2月下旬に城山の天神様に子どもたちが集まり、吉田の光専寺の門をくぐり、キオイをしていました。

最近では地区のお祭りの時、お宮でキオイをしています。

大島山でも行われていました。



吉田地区の天神様

# こう じん まつ 荒神祭り

## ①火難をさける

昔の人たちは、火災は火の神様のたたりで起きると信じていました。あばれ出したら大変怖い神様ですから、火の神様を「荒神様」と呼んでいました。

荒神祭りは、神棚に3本の新しいご幣を立てて、お神酒や大根、イワシ、菓子などをそなえて、火難に合わないよう神主、行者様をお願いしていのりをし、午前中に荒神はらいをしていただきました。

床の間には新しいたれ（紙垂）をかざり、家族が並んで神主に祝詞をあげていただきました。大難は小難に、小難は無難にと。

同時に厄よけ、無病息災、交通安全、五穀豊穰などを願ってお祈りをしました。また、お蔵、荒神、長屋、氏神様などの御神体（幣



おんたけ  
御嶽様の行者

束のたば）を作っていただき、入り口にかざりました。

上市田原町地区では、文政11年、慶応3年に大火にあっているため、秋葉神社に交代当番制で毎年代参して、区全戸分のお札をいただいてきて無料で全戸に配り、各家庭ではそれを台所に飾っています。（現在は郵送）

山吹地区ではお寺様に拝んでいただきました。

### 思い出

私の母は、寝る前に必ず火端の隅に残り火を一つとって、願い事を唱えて茶碗を伏せていました。



祝詞をあげる



荒神はらいの様子

# すい じん さま まつ 水神様の祭り

## 水の神様に感謝

水の神様に対する感謝の気持ちを表すのが『水神』祭りです。

昔から、水のあるところには水の神様（水神）がおられて、人々にきれいな水を恵んでくださるのだと信じていました。その水の神様に対する感謝の心を表すのが水神祭りです。

地区内の川水の取り入れ口近くに水神様の石仏があり、大切な水が区内を潤してくれるように、また、水の災害が起きないようにと願い、年度初めの休日に、石碑の前に山からとってきた榊を立て、新しいしめ縄を張りお祭りを行いました。区長、副区長、氏子総代が出席をして祝詞をあげ、直会も行いました。

水の神様がおられると信じていた昔の人たちは、川でも池でも汚さないように気を付けていたので、いつもきれいに澄んだ水が流れていました。



山吹地区の天竜川べりにある九頭龍大権現と水神の碑



祭りの準備1（しめ縄を張る）



上市田地区の水神様



祭りの準備2（榊に紙垂をつける）

# ヤショウマ

## ねはんだんご はな 涅槃団子(お花もち)

釈迦の涅槃の日(入滅、亡くなった日)北信地方で多く行われ涅槃会ともいわれています。地域によって2月15日、または3月15日に行うところがあります。ヤショウマ(米の粉で作った菓子)を作っておそなえします。

### ●お釈迦様の命日に

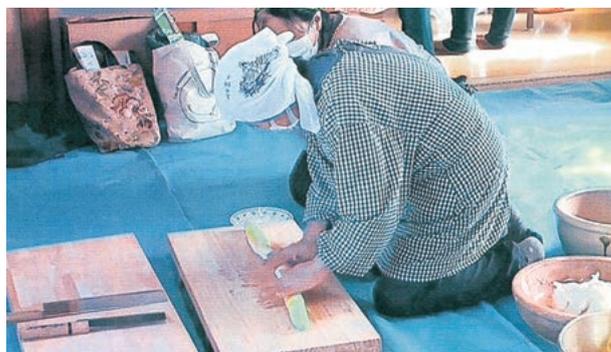
山吹地区では昭和11年の記録に「従来通り実施する」との記載があり、さらに(お釈迦様の)かけじくは明治11年のものとされ、昭和11年以前から伝わっているものです。伝統の涅槃団子作りは、お花もちとも呼ばれ、古くから伝わる製法で色とりどりの団子を手作りします。お釈迦様の命日に合わせた行事として現在も続いています。

同地区は約100戸が13組に分かれ、組ごと



もちつき

に持ち回りで団子を作るのが慣例です。当番となった組合の主婦ら十数名が地元の集会施設に集まって、30キロ分のもちをつき、赤や黄、緑の色粉を混ぜて棒状にし、1センチほどの厚さに切り団子にしておそなえするほか、地区全戸に配るのが伝統行事になっています。



ヤショウマ作り1(棒状にのす)

生活改善センター内の仏間にはお釈迦様が描かれたかけじくがあり、完成した団子は、翌日かけじくの前におそなえします。

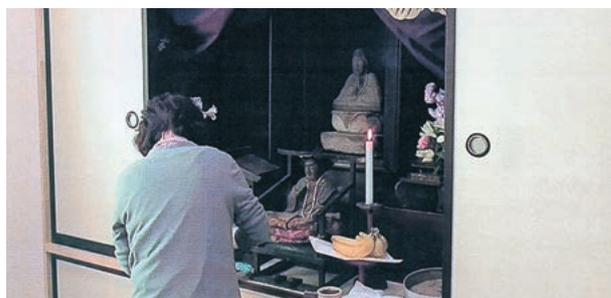
無病息災などを願って、長い間受け継がれています。貴重な行事として残していきたいものです。他地区、個人でもお花もち、ヤショウマを作って仏様におそなえしているようです。

県内では、北信地方で行われているようで



ヤショウマ作り2(配布のための袋入れ)

す。所によっては、金太郎あめのように、色付けしたもちを花形に組み合わせ伸ばして、切ると花の絵が出てくるように工夫して作って仏壇にそなえている地方もあるようです。



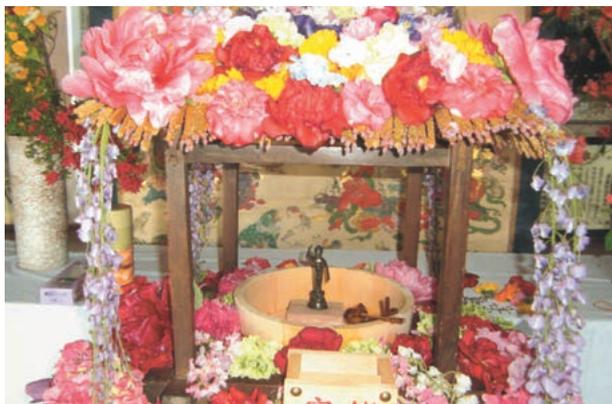
ヤショウマを仏壇にそなえる

# はなまつ 花祭り

花祭りは釈迦降誕をお祝いする日です。

北インドのカプラ城の王子シッダルタはルンビニの花園でマーヤを母として生まれました。そしてすぐに7歩歩んで、「天上天下唯我独尊」と言い、天地を指したといわれます。その姿を現した像に甘茶をかけて拝むのです。

5月8日、各お寺で行われ、お釈迦様の屋形をツツジなどの花でかざり、釈迦像の頭上に甘茶を注ぎました。子どもたちは瓶を持ち寄り、甘茶をいただいて花祭りの行事を楽しみました。



花で飾られた釈迦像

## 甘茶と花もち

家庭では、竹ざお（3m位）の先に、ツツジ、ウツギの枝と花をくくりつけて庭先に飾りました。

上市田には、お釈迦様の涅槃図があり、当日は飾ってお参りしました。また、お寺で甘茶をもらい、家に帰ってきてから、もらった甘茶を少しずつこぼしながら家の周りを一周りしたということもあったようです。

山吹上平では、3月15日に、当番に当たっ



「上市田 いろはカルタ」より

た人が地区を回ってお米を托鉢し、これを粉にして食紅を使って花もちを作りお釈迦様におそなえして、女性や子どもに2～3個分けてくれました。これを食べるとマムシにかまれないといわれました。



上市田のお釈迦様の涅槃図

吉田の本島家には庵があり、現在も行われています。

上市田では、現在でも、涅槃図が保存されていて、各組が順に当番となってかざり付けが行われています。

### 甘茶の作り方

①アマチャの葉（ヤマアジサイの変種）は8月中旬～9月頃に摘み取ります

②摘み取った葉を水洗いし、天日干して乾燥させます

③乾燥したら容器に詰め霧吹きで葉っぱに水分をしみ込ませ1日寝かせます

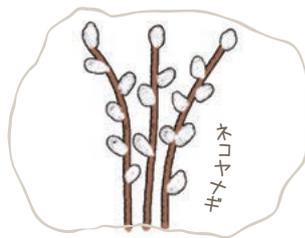
④発酵して来たらむしろの上に広げ、よく揉んでから再び日に干して乾燥させたら完成です



### 思い出

5月8日になると、ビンを用意してお釈迦様の庵に行きました。甘いものがない時代だったので、甘茶を汲んでの帰り道、飲みながら帰り、途中で終わってしまうこともありました。仕方なくまた庵に戻り、留守を見計らって、お釈迦様の足下にたまっている甘茶を、ビン一杯に入れて家まで持ち帰ったこともありました。

# はる ひ がん 春の彼岸



春分の日（3月20日もしくは21日）を中日とする3月18日～24日は春の彼岸です。先祖を敬いお墓をそうじして墓参りをします。

## ④ ご先祖様を供養

初彼岸の家では、親族が集まり仏さまを供養しました。ぼたもち（きな粉、あんこ、ごま）、天ぷらまんじゅうをおそなえし、うどんなども作り、振る舞いました。

花のない時期のため、川端に植えられたネコヤナギをお墓や仏壇などにおそなえしました。



出原では、初彼岸の家に手土産（手作りの甘酒など）を持っていくと、お返しにぼたもちをいただいて帰るといったこともあったようです。



彼岸の粉ひき『熊谷元一白寿記念写真集』より  
(昭和12年)



天ぷらまんじゅう

### 彼岸とは

仏教で、悟りの境界、涅槃の境界に至ることを「彼岸」といいますが、庶民の中では季節が変わる節目のひとつで、春分・秋分の日前後7日間をいいます。先祖をおまつりし、お彼岸の間にお墓参りをし、仏壇に毎日、精進料理やもち、団子などをおそなえます。「暑さ寒さも彼岸まで」との言葉が示すように、彼岸は季節の移り変わりを教えてくれます。

### 天ぷらまんじゅうの作り方

#### 【材料】

- ・天ぷら用まんじゅう……適宜
- ・天ぷら粉……適宜
- ・塩……少々
- ・酒……適宜



- ①衣を薄めに作る。(ダマがあっても良い。あまりかき混ぜすぎないようにする)衣に塩を入れる。
- ②衣の中にまんじゅうを入れ、(大きいまんじゅうは半分に切る)中温(120℃)の油でカラリと揚げる。

#### 【作り方のコツ・応用】

- ・天ぷら粉をとく時に、水のかわりに酒を使うと、時間がたっても固くならない。

# ひな祭り

五節句の一つで、3月3日上巳の節句とも言います。女の子の幸せ、成長を祈ってひな壇を設けてひな人形を飾るお祭りです。

高森町では月おくれの4月3日、おひな様をかざり、親戚を招き内祝いをしてヨモギを摘んで草もちをつきました。

菱もちにして、甘酒などをひな壇にそなえ、親戚、家族に振る舞いました。

## おひな様に願う

おひな様は、お嫁さんの実家からは内裏びなが、仲人からは隨身びなが、そして兄弟姉妹からは五人ばやしやそのほかのひな人形を贈る習慣があったようですが、その家によって違いました。

下市田では、この節句が近づくと、かご屋さんが、色もようの付いた小さな花魚籠を売りに来るのでそれを買ったり、別の店で買ったりして魚籠を用意し、日当たりのよい土手などでヨモギを摘みました。そして、摘み集めたヨモギを使って草もちをつきます。この



高森百年の写真史より「四月節句 ひな祭り」

## ひな祭りで使う植物



草もちと別に白い普通のもちと合わせて、大きなひし形の重ねもちにし、それを持ってお嫁さんや新婚夫婦が実家へあいさつに行くようにしていました。

おひな様は女の子が大きくなるまで飾られるのですが、早く飾って節句が済んだら早く片付けないと娘が縁遠くなる、といわれていました。

## 草もちの作り方

【材料 (30個分)】

- ・うるち米粉…4カップ・もち米粉…1カップ
- ・熱湯…約2カップ・ヨモギ…300g・小豆あん…1kg
- ・重曹…小さじ2・塩…少々・きな粉…適量

- ①ヨモギは若葉を摘み取り、たっぷりの湯に塩少々を入れてゆでる。煮立ったところで重曹を入れ、ヨモギが鮮やかな緑色になったら水にとり、アクを抜く。水気をしぼり、細かく切った後、すりこぎでよくたたいておく。
- ②うるち米粉と、もち米粉をよく混ぜ合わせたものを、熱湯で耳たぶくらいにこねて、ひとにぎりずつちぎる。ぬれ布きんを敷いた蒸し器で、約15分くらい蒸す。
- ③②に①を混ぜ、しっかりとこねる。
- ④あんを個数に丸めておき、③に包み、一個ずつきな粉をまぶす。

## 【作り方のコツ・応用】

- ・もち米粉を入れることで、ひと味違ってくる。



平成10年頃のひな祭り

# おさな開き

新しい事を始めるときや、物事を開始するとき（家を建てる時の地鎮祭）などで神々にお願いをする神事が行われます。今では少しずつ減ってきましたが、神々にお祈りする意味は、自分の心に力を入れる意味も含めて大切なことだと考えられてきました。

おさな開きは、「おさびらき」「さなえびらき」とも言います。5月中旬、早苗月ともいわれる種まきの好期に、豊作を祈って神に祈願をするお祭りです。

## 豊作を願って

田植えの初日、水の取り入れ口（水口）にある水神様に、トックリに入れたお神酒、重箱に詰めた白飯にきな粉をふりかけ、タツクリ（田つくり）大根干などの煮物をおそなえし、ススキを2本たてました。

また、このお祭りは苗代の土手で行われましたが、家の中では、お神酒や灯明を挙げて豊作をお祈りし、家庭ではご飯にきな粉をかけていただきました。白米にきな粉を振りかけるのは稲の花を表すもので、花がしっかりと咲いて豊作になるようにと願うものです。

田植えは、稲が実らずに立つことを恐れて、辰の日や酉の日を避けて行っていました。



たつくり

近年は土日や祭日の都合のよい日に、田植え機で行うようになりました。



苗代



腰を伸ばして一休み広い田は大変だ 一吉田河原一  
（昭和50年）「高森百年の写真史」

### たつくりの作り方

#### 【材料（5人分）】

- ・ たつくり…… 50g
- ・ しょう油… 大さじ1
- ・ 酒…………… 大さじ1
- ・ 砂糖…………… 大さじ4



- ①熱したフライパンで、たつくりを焦がさないように、じっくり炒める。
- ②カリカリになったら、しょう油と酒を合わせたものを入れる。ジュツという音がするので、すばやく火をとめ、砂糖（大さじ2）をまぶす。
- ③少し冷めてから、残りの砂糖（大さじ2）を入れてまぶす。（一匹一匹がくっつかないようにする）

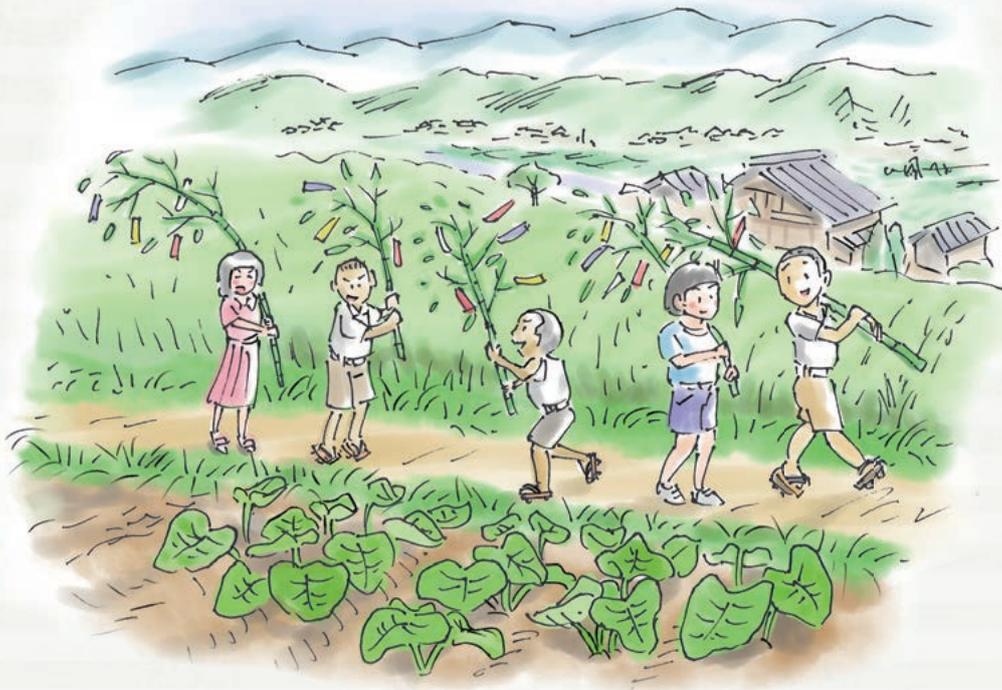
# 夏むかを迎える



二十四節気の一つである「立夏りっか」は、暦の上で夏こよみが始まる日であり、5月6日ごろになります。この時期に行われる田植えは昔と比べて機械で行うようになり、ずいぶんと省力化されましたが、夏の時期にぐんぐんのびる雑草の草刈りは、今でも大変な労力が必要になってきます。

このように農事が本格化され、それにとまなう豊作を祈る行事だけでなく、迎える暑い夏に備えたり、夏病みにならないように祈ったりする行事もあります。そして、8月15日を中心にして先祖の霊たまを迎えるお盆ぼんの行事が行われます。

高森町で行われている夏の年中行事としては、端午の節句たんごせっくや七夕まつりのような子どもたちが中心となる行事、おさなぶりや農休みという農事に関わる行事、衣替えころもがや祇園祭ぎおんまつり、土用の丑どよううしという暑い夏に備える行事が行われた後で、正月の行事と対をなし、先祖の霊たまを強く意識する盆行事ぼんがどの家でも盛んさかに行われています。



# 端午の節句

端午の「端」は「はじめ」という意味で、午の月（5月）の最初の午の日を節句として祝ったものでした。

古来邪気を払うため、ショウブやヨモギを軒に挿してちまきやかしわもちを食べました。「ショウブ」と「尚武」の音が似通っていることもあって、近世以降は男の子の節句とされてきて、甲冑、武者人形などをかざり、庭先にのぼり旗やこいのぼりを立てて、男の子の成長を祝うようになりました。

第2次大戦後は、「こどもの日」として国民の祝日となり、端午の節句となりました。

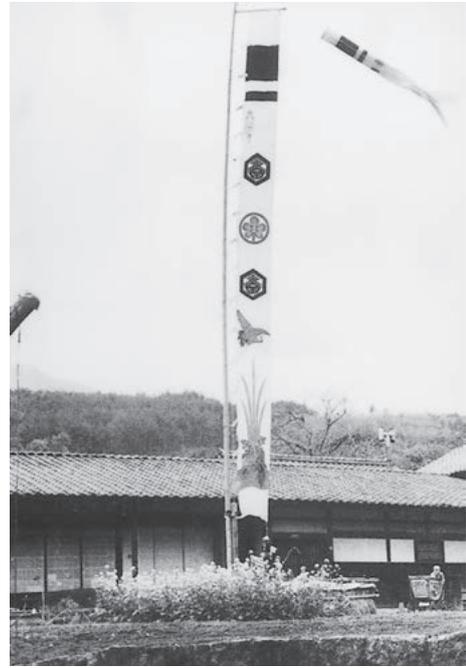
## ④ ショウブの節句

高森では、6月中旬や6月5日に行われてきました。のぼりは嫁方の実家で購入して贈ってくれました。のぼりには勇壮な武者絵を描き、上方には当家の家紋（黒）と嫁方の実家の家紋（赤）を入れ、そのとなりにこいのぼりを立ててかざります。屋根のひさしにはショウブやヨモギを指し、風呂にはショウブ・ヨモギを入れました。ショウブ湯に入る



武者人形

## 端午の節句で使う植物



高森百年の写真史より「初節句を祝うのぼり」  
(昭和34年)

と風邪をひかない、ショウブを頭に巻くと頭痛がよくなるといわれました。

家庭では米粉でかしわもちを作り赤飯を炊き、神棚にお神酒をそなえてお祝いしました。

ショウブを使った行事は現在も行われていますが、新暦の5月5日に男の子の誕生を祝うようになり、端午の節句とショウブの節句とは別々に行っている家もあります。

## かしわもち(朴葉もち)の作り方

【材料(20個分)】

- ・うるち米粉…500g・熱湯…450cc
  - ・粒あん…500g・柏の葉(または朴葉)…20枚
- ①米粉をボールに入れ、熱湯を注ぎ、箸でよく混ぜる。熱いうちに両手でよくこねて、耳たぶくらいの固さにする。
  - ②蒸し器にぬれ布きんを敷き、よく湯気が上がったところに、①をちぎったものを入れ、15分くらい蒸す。蒸し器から取り出し、もう一度よくこねる。
  - ③②を20等分する。これを楕円形にのばし、丸めた粒あんを包んで二つ折りにする。あんが出ないように周りを指で押さえる。
  - ④柏の葉(朴葉)に包み、もう一度湯気の上で蒸し器で、葉の色が変わるまで蒸す。



# 味噌炊き

4月上旬から5月中旬、常会ごと、または、となり近所ごとに大釜や大豆つぶし機を共有して、大釜で大豆を煮て、つぶし機で大豆をつぶし、米こうじを混ぜて、レンガ形、またはおにぎり状に作り味噌蔵で仕込みました。これを「味噌炊き」といいます。

## 常会で味噌仕込み

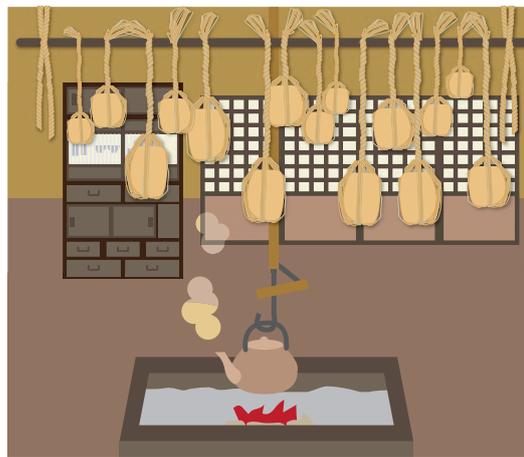
下市田では、味噌炊きは5月8日の月遅れのお釈迦様の誕生日がよいとされていました。

たきぎは事前に山へ行ってネズミサシをとってきて、それをなたで小さく切りながら火をたきました。午後に火をつけて、水加減を見ながら夜中まで炊いて火を止めます。翌朝にはその豆をつぶすのですが、昔は、その豆を半切おけに移してわらぐつ（のちに長靴）を履いてふみつぶしたのだそうです。その後、豆つぶし機（押し出し機）が使われるようになり



豆つぶし機

ふみつぶされた豆はしゃくしですくい上げ、別に用意されたおけに入れ、それをみんなで大きなシマウリくらい



の直方体（レンガ形）・まくら形・球形などの味噌玉にしたそうです。天井の高い土間やいろりの吹きぬけのはりなどを使い、みそ玉を吊るしました。

牛牧では、5月中旬、こうじ屋商店から大釜や押し出し機を借りて、大豆を煮て味噌の仕込みを行いました。

吉田では、常会共有の大釜で大豆を煮て、つぶし機で豆をつぶし、米こうじを混ぜ、レンガ形に作り、味噌蔵で仕込みました。

### 味噌の作り方

【材料（塩分12%の場合）】

- ・大豆…13kg（一斗）・こうじ…11kg（大豆の6～10割）
- ・塩…5.4kg・種水…2.1kg（仕込み全重量の5%以内）
- ・塩（種水に加える）…300g

- ①大豆はきれいに洗って水に浸しておく。（3～5月頃で16～20時間）
- ②ざるに上げて水を切った後、釜に入れて3～4時間くらい煮る。（指でつぶして柔らかくなるまで煮る）
- ③火を止めて、約1時間蒸らす。
- ④豆を、豆つぶし用の機械でつぶす。  
ビニールシート等に広げて冷ましておく。
- ⑤仕込み準備をする。
  - ・塩とこうじを混ぜて、塩切りこうじを作る。（塩は、ふり塩の分を少しとっておく）
  - ・仕込み大豆6.5kg（5升分）を1単位とすると作業がしやすい。
- ⑥つぶした大豆と、塩切りこうじをよくまぜ合わせる。（この時に、よくまぜることがポイント）
- ⑦まぜ終わったら、手のひらに乗るくらいの味噌玉を作り、丸める。
- ⑧桶の中に漬け物用のビニール袋を広げておき、すき間ができないように味噌玉をたたきつけて詰める。
- ⑨桶の中にきっちり詰まったら、ふり塩をして密封する。
- ⑩原材料の3割くらいの重さの重石をする。桶をビニールでおおい、ひもで回りをぐるっと縛ってほこりや雨水が入らないようにする。
- ⑪桶はできるだけ風通しが良く、あまり冷所でない、直射日光の当たらない場所に置く。



# おさなぶり

田の水取り入れ口（田の神）に、早苗<sup>なえ</sup>2たば、お神酒、白いご飯をそなえ、田植えが無事終了したことを祝うとともに豊作を祈ります。田植えが無事終わったことを祝って、それぞれの農家や「結い」をした集落単位で行うお祭りで、米作りの歴史の浅い北海道を除く日本各地に伝わる行事です。

本来は、「サノボリ」と言ったらしく、サは稲<sup>いね</sup>（田の神）、ノボリは、田植えが終わる（登る）がなまって「サナブリ」となったのではないかと思われています。

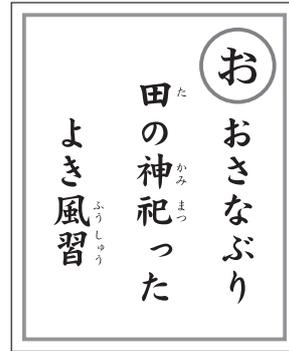


田植えを終えた田の虫よけ札

## ④ 田植えを終えて秋の実りを祈る

田植えの終わりと労をねぎらう節目の日。神社から「虫よけ札」をいただき、水田の水口に石を置き、苗2たばを立て、赤飯と尾頭付き魚<sup>お</sup>をそなえ祝います。また神棚<sup>だな</sup>の恵比寿<sup>えびす</sup>・大黒それぞれに苗1たばと赤飯、尾頭付き魚をそなえ祝います。水口にススキを立てて先を折り、風よけとします。（吉田）

神棚にそなえた苗で、七夕の日<sup>あら</sup>にすすりを洗います。また、白いご飯にきな粉をかけて、



「上市田 いろはカルタ」より



稲が黄色く実るように秋の収穫<sup>しゅうかく</sup>を祈ります。（山吹<sup>ぶき</sup>）

## ④ 機械化により1ヶ月早まった行事

機械化が進み、手作業での田植えや結いによる作業も少なくなり、おさなぶりの行事も各家庭ごとに行われるようになり、さらにはやらなくなった家庭も少なくありません。

昭和の終わり頃<sup>ころ</sup>の山吹地区のある農家では、とても重労働だった田植えが終わると、今年も豊作であるように祈る大切な行事として位置づいていました。田植えが終わった日に、農機具を洗って納めるための行事（マンガ洗いとも言う）でした。

昔は6月末から7月初めでしたが、機械化により1ヶ月くらい早くなっています。また機械で行うようになってからは、この風習もだんだんやらなくなりました。

### きな粉ご飯

作り方は、ご飯にきな粉をかけるだけです。

子どもには、おにぎりにすることもあります。

きな粉を、米の花の花粉に見立て、よく花が咲き、豊かな実りを願ってお祝いとして食べる習慣がありました。



# のう やす 農 休 み

おさなぶり同様、田植えが無事終わったことを祝い、かつ豊作を願う祭りで、家族や「結い」をした単位、地域等々で行います。

田植えが終わった後の慰労の日が、「農休み」と言われ、6月下旬に行われることが多く、期日はその年の田植えの状況により、事前に地区全体に周知されます。

地域のスポーツの会であったり、慰労の会であったり、内容は様々です。農休み・お節句・陽気祭りと3日間行う地域もあります。



農休みのバーベキュー「高森百年の写真史」補助写真より

## ④ 仕事をしない一日

田植えを終え、その労をねぎらって、仕事をせず、一日休みます。常会組で慰労会（料理屋で一席）を行います。若い嫁を里帰りさせました。（下市田）

部落に流れ込む水路の近くに、水神と彫った石碑があり、水神祭りを行いました。祝詞をあげ、直会を行いました。（上市田）



スポーツ大会のようす

## ④ 農休みの名残り

機械化が進み、田植えに要する時間も減少し、農休みの意義もなくなってきています。

例年、町のスポーツ大会や常会の暑気ばらいが6月下旬から7月上旬に計画されていることが多いようですが、農作業が一段落したこの時期は、農休みの時期に一致しており、かつての名残りかもしれません。

しかし、「きょうは農休みだ」という声は、今なお聞かれます。田植えのような一つの節目となる仕事を終えた後、一段落、一休みしたいという共通の思いが伝わってくる言葉です。

# キヌヌギ

ころも が  
(衣替え)

季節の推移に応じて衣服を替えること、またそのために衣服の収納場所を変更することなどよりよい生活習慣の目安となっています。

衣替えの習慣は、平安時代の宮中行事から始まり、中国の風習にならって旧暦の4月1日、10月1日に着替えると定め、「更衣」と呼びました。民間では「衣替え」と言うようになりまし。江戸時代は年4回衣替えをしましたが、明治以降は、現在のように6月1日、10月1日の年2回となりました。

役人・軍人・警察官の制服に定めましたが、やがてこれが学生服に、次第に一般の人にも定着し、衣替えを行うようになりました。

## 衣類の虫干し

特別な例はなく、全国と変わりありません。昭和の終わり頃の山吹地区のある家庭では、学生は6月1日が衣替えでしたが、一般はその時の気候によりその前後に行いました。昔は防虫剤もなかったので、衣替えに合わせて家中に紐を張ってかけて衣類の虫干しを2・3日ばかりで行っていたそうです。

## クール・ビズ

平成17年に環境省主導のもと、地球温暖化防止のため、冷房時の室温28度で過ごすための軽装(クール・ビズ)が提唱され、実施期間は6月1日～9月30日としましたが、近年では、企業によっては、5月1日から実施されるようになり、国民の間にかかなり定着してきています。

## クール・ビズの定着による変化

衣替えは強制的なものではなく、習慣です。

寒冷な北海道と温暖な南西諸島の衣替えの時期は異なり、またクール・ビズ実施により時期も様々になってきました。



登校する生徒(鼎駅前)

本格的な夏に向けて衣替えの時期を迎え1日、飯田下伊那の各地で夏用の制服や軽装で登校する高校生らの姿が見られた。半袖や、白を基調とした夏らしい装いで学校に向かって

## 本格的な夏に向け 飯田下伊那各地で衣替え

いた。

肌寒く、冬用のジャケットや上着を着た生徒も。電車を降りて駅から一斉に出てきた生徒らは、列をつくって傘を差し、友人と談笑しながら学校に向かってい

この日の朝は雨で

た。

# ぎ おん まつり 祇園祭

つしまさま まつ  
(津島様の祭り)

えきびょうの流行を防ぐために始まった祇園祭は、人々が積極的に関わるお祭りとして位置づき、人々の楽しみとなってきました。長い歴史の中では、大火や戦乱のために中断を余儀なくされた時もありましたが、町民の願いが大きな力となり、今なお行事が続けられていることに意義があります。

祇園祭は、京都市東山区の八坂神社（祇園社）の祭礼で、京都三大祭りの一つです。その影響がみられる祭礼として、津島様のお祭り（尾張津島天王祭）が7月末に行われます。

津島様は、各神社の末社として祀っており、青いススキで屋根を作って祭りをします。夕刻、門先にススキを10本ほど立て、津島牛頭天王と書いたとうろうを上げます。キュウリ・ナスなどの野菜をそなえ、夕はうどん、翌朝はご飯をそなえます。



現在も行われている飯田市大門町の津島様



山吹の垣外（丸山公園近く）の津島牛頭天王と刻まれた石碑

## ④ 部落の行事として行われた津島様

京都八坂神社の祭礼。ノカンゾウの花など庭先にそなえました。商店では売り出し等で賑やかでした。（山吹）

上市田の津島様は、昔は問屋の屋敷内に祭られ、祭り当日は問屋の表に消防組のバレン旗、鳶口などの表道具を飾りました。祭りになると青年衆が青竹とススキ、アオイの花を添え、野菜のほかに新しい粉でうどんを切り、膳に盛ってそなえました。参道には行燈十数個に灯を入れ参拝しました。区や部落の行事として行われていました。

## ④ 商店街の取り組みとして今なお残る祇園祭

祇園祭は、商店街の人々の取り組みの一つとして、残っています。松川町新井商店街の祇園祭は、今なお盛大に行われ、地域の楽しみの一つとなっています。

# ど よう うし 土用の丑

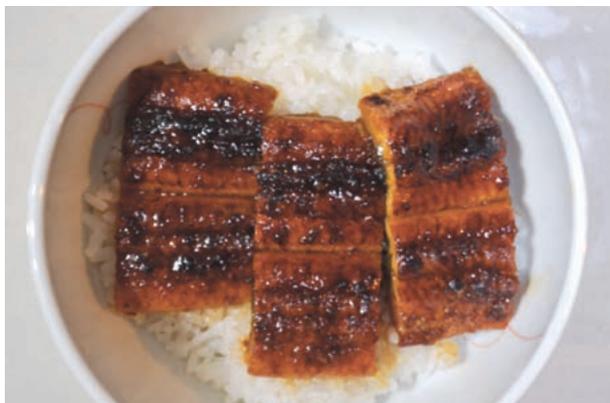
## ④ 平賀源内の発案

日本で暑い時期を乗り切るために、栄養価の高いうなぎを食べるという習慣は、万葉集にも詠まれており、古くからの風習でした。さらにうなぎ屋から相談を受けた平賀源内の発案により、旬でない売れない夏に「食すれば夏負けすることなし」と看板をかかげさせて大繁盛、他のうなぎ屋も同一歩調で、うなぎを食べる風習が定着したという説が有力のようです。

## ④ 夏バテ防止に食べるうなぎ

夏の土用の丑の日となると、7月下旬から8月上旬にかけて、年に1～2回該当日が来ます。

古くからの習わしですが、栄養価の高い物を食することが当たり前となった現代において、夏バテ防止のためにうなぎを食べるといふ行為は医学的根拠に乏しく、効果があまりないといわれています。



土用の丑：ウナギのカバ焼き

## ④ 「う」の付く食べ物を食べる風習

「うなぎ」「う」の付く食べ物（馬肉、牛肉、うどん、瓜、梅干し）を食べました。

（下市田）

今のようにうなぎは手に入らないので、肉や魚を焼いて体に力をつけるという意味があり、土用の丑の日にも同じように魚を焼き、頭や骨も焼いて食べました。（吉田）

この時期に「土用」「虫送り」などの行事があり、土用の丑の日にはドクダミを風呂に入れました。（山吹）

## ④ 売り出しの目玉に

時期に合わせて、商店やうなぎ専門店では、売り出しを行い、多くの客を集めています。さらに年間6回ほどの土用の丑の日とうなぎを売り出す商店もあります。

### 「土用の丑の日」とは

土用は、立春・立夏・立秋・立冬直前の18日間を示す言葉です。昔の暦では日にちを十二支「子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥」で数えました。つまり土用の丑の日は、「土用の期間におとずれる丑の日」を指します。土用は毎年違うので土用の丑の日も毎年違います。夏の土用の丑の日1回か2回あり、2回ある場合は最初の日を「一の丑」、2回目の日を「二の丑」と呼びます。

# たな ばた 七夕まつり

(新暦7月7日  
月遅れ8月7日)



サトイモの葉のつゆ

七夕は五節句のひとつで、ひこ星、おり姫の星物語にもつながられ7月7日が節句ですが、新暦ではちょうど梅雨時でもあり、高森町の多くは、晴れて星の見える晴れ間の多い月遅れの8月7日に七夕をしました。

## ④ 少し前の七夕まつり

町内の例では8月6日の朝、サトイモの葉に溜まっている朝つゆを集めて、そのつゆをすずりに入れて墨をすります。筆を使ってすった墨で、五色の短冊に、願い事(子どもの健康・学問や字の上達など)、天の川や星の名(天の川・ひこ星・おり姫など)を書いて、カンジョリ(紙ひも)をつけて、笹竹や青竹の枝に結び付け庭先に立てかざりました。

そのかたわらに台を置き、上にかごろじを敷いて、初取りの夏野菜(キュウリ、ナス、トマト、トウモロコシ、夕顔など)や、うどんなどをそなえました。くわえて、米を計るますを洗い一緒にそなえました。また、使ったすずりをおさなぶりにそなえた苗で洗い字の上達を願ってそなえるところもありました。



かごろじにそなえ物(七夕かざり)

7日の夜に星が見えず雨が降ると、ひこ星とおり姫が会えなくて、その年は悪い病気が流行ると言っ、雨が降らないように願いました。

七夕かざりは、8月8日の朝、川に流しました。

## ④ 現在の七夕まつり

現在では、筆記具の種類も多くなり、墨をすって筆を使うことも少なくなり、川に流す風習もなくなりました。七夕かざりも一部公共施設や保育園では、やっているところもありますが、子どものいない一般家庭では、ほとんど見られなくなりました。



保育園の七夕かざり(平成12年頃のみつば保育園)現在も7月7日に町内各保育園では七夕をして、笹のかざりを一枝ずつ、持ち帰るそうです。



かごろじ  
蚕籠  
竹や藤などで編んだり、組んだりして平に仕上げた器物で、養蚕の盛んな頃は上に柿渋紙などを敷き、桑の葉を与え、養蚕の成育の棚として使いました。

# 盆行事

せんぞ みたま まつ ぎょうじ  
(先祖の御霊を祭る行事)

盂蘭盆といい、7月15日を中心に祖先の冥福を祈る行事です。高森町などこの地域では、月遅れの8月13日から8月16日にかけて行われています。この4日間は、仕事もすべて休み、祖先の御霊を迎えます。

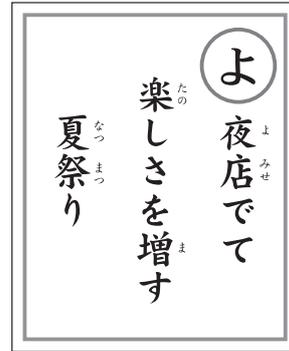
## ④ 高森町の盆行事の準備

8月1日を「かまのふた」と言い、地獄の釜のふたが開く日で、先祖など仏様が、お盆にむけて帰り始める日として、お墓をそうじします。墓が留守の間、邪気が入らぬようふたをするともいいます。お弁当箱におやきもちをそなえ、おやきもちには、カボチャなどを刻んで入れるところもあります。仏壇には、おやきもちや天ぷらなどをそなえ、仏様が迷わぬよう準備します。

新盆の家では、しるしとして、家紋入りの盆ちょうちんを上座敷の縁側の軒先につるします。家の様式が変わり、今では、玄関先につるす家が多くなりました。

通常は、盆の準備として、8月1日から12日の間にお墓のそうじに行き、この間に、山や田畑の土手へススキを刈りに行き、持ち帰ったススキ(萱)をゴザに編み、仏様の座敷とします。

特に7日をお盆の準備の大切な日として、「ナヌカビ」と呼び、墓そうじ、井戸替え、物洗いなどをしました。今でも共同墓地のそうじなどは7日前後に行われます。



「上市田 いろはカルタ」より

## ④ 「上市田いろはカルタ」解説書より

盆踊りが始まったのは昭和35年からで、お宮の境内でお盆の15日に行われていました。役員が丸太と板で櫓を作り、その上に盆踊りの指導者が上がり、その櫓の周りを皆さんが囲んで一緒になって踊って楽しみました。ところが、盆の15日ともなると、各家庭ともお客さんが来ていたりして忙しく、参加者が減ってきたため、一週間ほど早めて七夕の8月7日に実施するようになったのが昭和45年からです。当時は前日の6日にスイカ割り大会をして、7日に盆踊り、花火大会をするようになりました。

その後、区内の意見が分かれて、15日か16日にしたり、7日にしたりと変動がありました。平成11年から小学生の夏休み行事が加わり、夏休み前の7月下旬に納涼祭が行われるようになって現在に至っています。



縁側にさげられた盆ちょうちん

## 8月13日 迎え盆

13日には、お棚（精霊棚）を組んで、編んでおいた萱を敷き、盆花、果物、団子、お水などをそなえ、仏壇からお位牌を出し上段にかざります。仏様が早く家に来るように、キュウリの馬をそなえ迎える準備をします。「おちつきのやきもち」やナスなどをさいころ状に細かくきざんだものをそなえます。このさいころ状のナスに、お盆じゅう、ミソハギの枝で水をかけてぬらし続けるところもあります。

夕方、墓参りをして、墓地と家の庭で迎え火をたきます。迎え火は、箸ほどの木片を稲わらでたばねた「松明」に火を灯したり、麦わらをたくなどします。新盆の家庭では、庭に砂山を作り、たくさんの線香やローソクを立てたりして、近親者が集まり御霊を偲びます。仏様は線香や、迎え火のけむりに乗って家に来ると言われています。また、仏様に入ってもらうように風呂のふたを開けておいたり、お位牌のある部屋の雨戸障子を開けるなどをする家もあります。



盆の迎え火、送り火

## 8月14日・15日

8月14日、15日は、天ぷらやササゲのゴマあえ、うどんなどのごちそうを作り、そなえます。15日は仏様が家に泊まる最後の日。ゆっくり帰るようにと、ナスの牛を作りそなえます。つくった馬や牛には、うどんをたづな代わりにかけます。牛、馬は同時にそなえる家が多くなりました。そして仏様のお土産を準備します。サトイモの葉の上にクルミ、途中のお守りとして、いが栗やサンショウの枝などのとげのあるものを乗せ、仏様のお土産としました。



新盆の迎え火（昭和10年頃）  
「高森百年の写真史」より



かざ飾ったキュウリの馬、ナスの牛

## ● 8月16日 送り盆、やぶ入り

16日の朝、仏様をお墓に送って行きます。そなえ物を萱のゴザに包み、川に流すことはしなくなりました。今は、墓参りと送り火で仏様を送り、その後地域の余暇行事などに参加するなど、休みを楽しみました。その日は、やぶ入りといい、奉公に出ている人も休みをもらえ、家に帰りゆっくと休日を過ごしました。また、14日・15日・16日に盆踊りを実施するところもあります。



現在の盆踊り



盆踊りのやぐら、踊りの様子

### 市田の灯ろう流し

高森町には、夏の盆行事の一つとして、有名な「市田の灯ろう流し」があります。全国的には精霊流しとも言われ、盆に家庭に迎えた先祖の霊など、諸霊を黄泉の国に送ります。

高森町下市田の天竜川に近い出砂原地区が中心となり、精霊をのせた灯ろうを流し、花火を打ち上げ、お盆の行事をしめくります。

特に、灯ろう流しは、新盆の家庭の霊を送るのが主という事で、町内六ヶ寺の住職が一同に会して「お経」を唱え、流します。

昔は、盆のかざり物やそなえ物を川に流し、霊を送りましたが、美化、安全のためにやらなくなり、灯ろう流しの行事に集約されました。



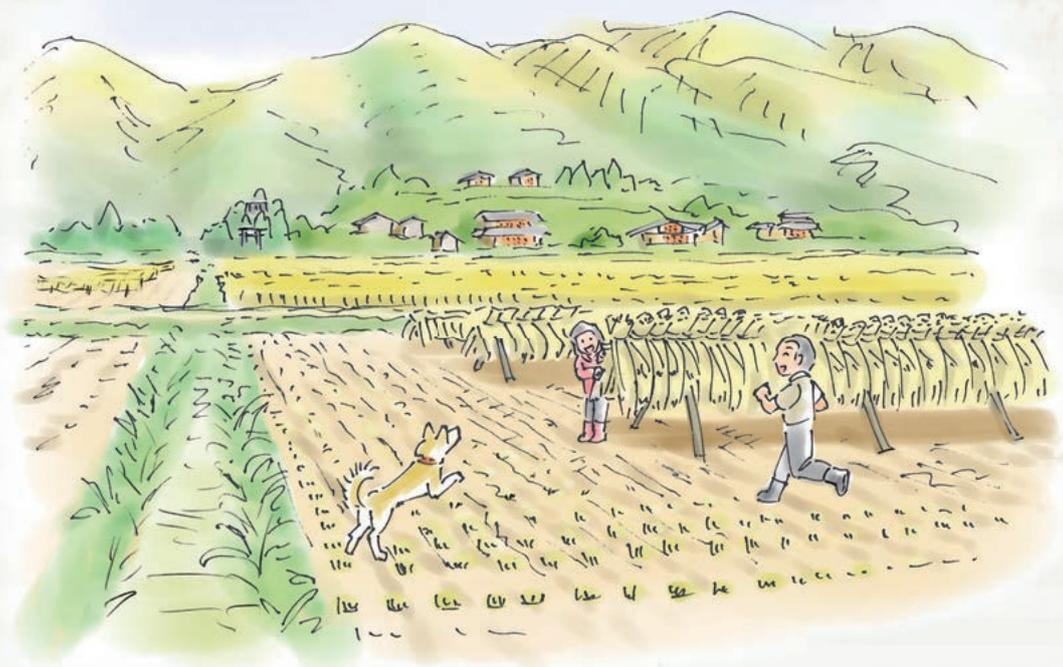
# 秋を迎える



二十四節気の一つである「立秋」は、暦の上で秋が始まる日であり、8月8日ごろになります。ところが盆行事は月遅れで行われているためか、夏の行事と考えられており、お盆が終わると秋というふうにとらえられています。そのため、この冊子でも秋は盆行事を終えてから、としました。

秋は収穫の季節です。作物の豊作を感謝する行事と寒さが厳しくなる冬に備える行事などが中心となった年中行事が展開されます。

高森町では、収穫直前の被害を避けたいと願う風祭りや豊作に感謝するお月見、こばしあげ、恵比寿講と子どもの成長を願う七五三などが秋の行事として行われます。また、冬に備える行事として冬至などが今も行われています。



# かぎ まつ 風祭り

9月はじめ

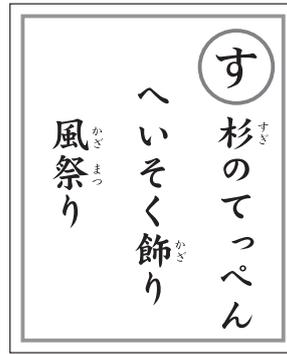
秋の収穫期を控え、立春から数えて二百十日にあたる9月はじめ、台風など「風害から農作物を守るように」と、風の神様に祈る行事です。

## ●神社での風祭り

町内の例では、地区の神社で、氏子総代や地区の役員などが参列し、神主が祝詞をあげ祈願します。御幣を神社の背の高い神木の頂に立てまつります。神社から配られる風神のお札をいただき、切った竹の棒先につけ、田畑に立て祈願します。今では、神社でのまつりが主となりました。



神木の頂に立てられた御幣



「上市田 いろはカルタ」より



神木に上がる氏子



田んぼに立てたお札

# つきみ お月見

旧暦の十五夜の満月を見て静かな時を過ごします。

秋の満月をめぐる宵は、十五夜・「中秋の名月」（旧暦8月15日の満月・新暦で9月中旬ごろ）と十三夜・「後の名月」（旧暦9月13日・新暦では10月中旬ごろ）とがあります。

## ●中秋の名月

町内の例では、いずれも、稲穂に見立てたスキの穂と団子は必ずそなえます。一緒に竹や藤の箕へサトイモ、枝豆を並べそなえます。

ついたもちを鏡もちにして大根の葉を敷いた盆に乘せたり、もちをハンギレに容れ、もちと共に大根2本をのせて、月の見える屋根やひさしにそなえます。子どもたちは、お月様のお使いとされ、そなえ物を見つからない



十五夜のそなえ物

### 月の満ち欠けの和名

- 新月
- 眉月<三日月>
- 上弦<夜半の半月>
- 十三夜月
- 満月
- 十六夜月
- 立待月(17日目の月)
- 居待月(18日目の月)
- 寝待月(19日目の月)
- 更待月(20日目の月)
- 下弦(昼の半月)
- 月隠り(晦日、つきごもり)

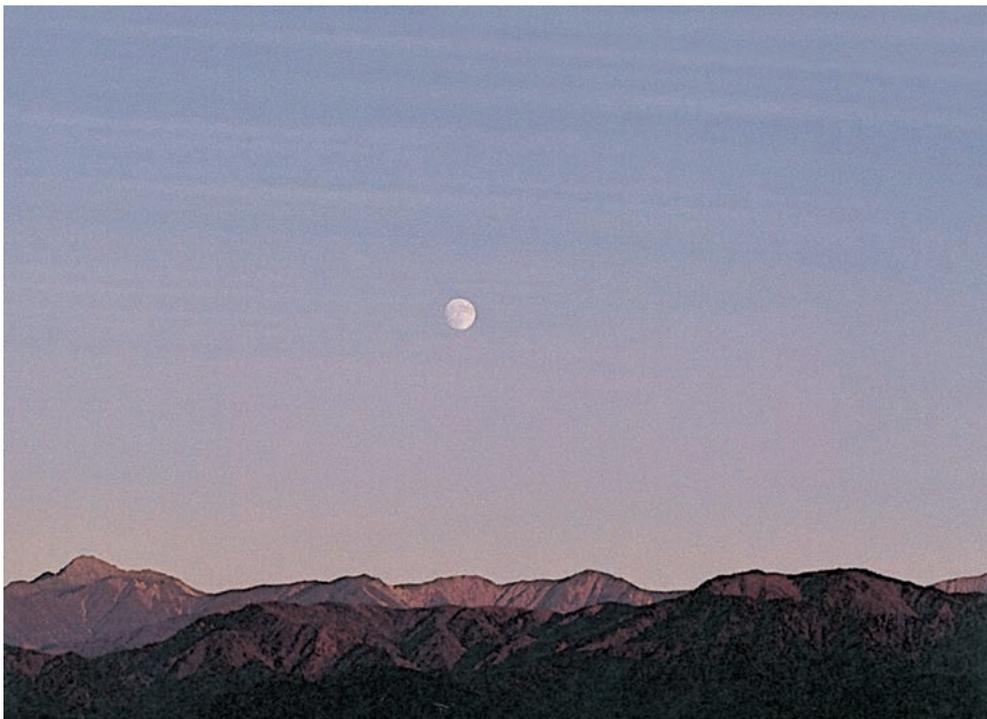


十三夜



十五夜

ように頂戴することが許された時代もあり、おそなえ物は早くなくなる方が「縁起が良い」とされました。



月夜平から見た夕暮れの中秋の名月（平成29年10月4日、午後5時頃）

# あき ひ がん 秋の彼岸

しゅうぶん ひ いっしゅうかん  
(秋分の日をはさんだ一週間)

秋分の日を間にした、前後7日間が秋のお彼岸といいます。彼岸の7日間は、仏教の法会で、日本仏教だけの行事です。初日を彼岸の入り、秋分を中日、終日を彼岸あけといいます。昼夜の長さがほぼ同じで、中日の日の入りが真西に当たるので、西方浄土への願いと合致して行事化されたと言われていています。

## 彼岸の賑わい

町内の例では、春の彼岸と同じように、天ぷらやおはぎをそなえ、墓参りをして先祖を供養します。

昭和30年代頃まで、元善光寺（如来様）へのお参りに行きました。露店が並び、大勢の参拝客で賑わいました。子どもたちは、両親から少しばかりのこづかいをもらい、飴やニッキ、ひよこなどの買い物を楽しんだと言うことです。



彼岸の日没 彼岸の6日間、角田原から見える日没は、虚空蔵山に沈む。(虚空蔵=菩薩の一つ)



彼岸花

### 彼岸花

曼珠紗華ともいい、根には毒があるのでモグラ除けに利用され、多くは土手や田の畦に生えています。秋の彼岸ころに花が咲くので、この名があります。茎と花だけの特徴的な形から仏の花と敬遠されましたが近年、観賞用としても植えられようになりました。



仏壇に  
そなえられた  
おはぎ

### おはぎの作り方

【材料(4人分)】

- ・もち米……………2・1/2合
- ・うるち米……………1・1/2合
- ・小豆あん……………200g
- ・きな粉……………30g
- ・塩……………少々
- ・砂糖……………100g



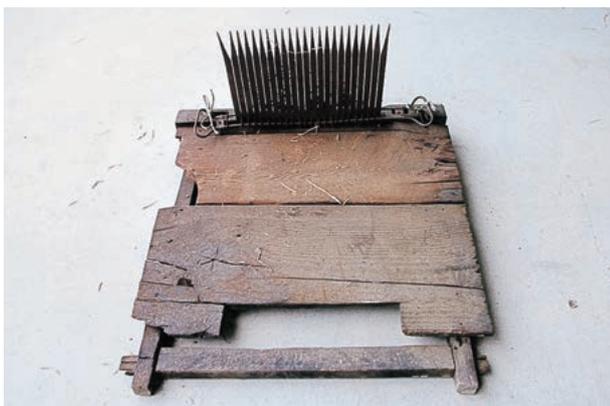
- ①もち米・うるち米をまぜて洗い、普通の水加減にし、30分くらいおいてから炊く。
- ②炊き上がったら、塩少々を入れて、ご飯粒の形が少し残っている程度につぶす。
- ③ひと口大に丸める。小豆あん、塩と砂糖で味付けしたきな粉を付けて、器に盛る。

# こばしあげ

10月下旬から11月下旬、稲あげ、脱穀の終了を祝う行事です。

## ④ 収穫の祝い

稲刈りや脱穀などの秋の収穫作業が一段落するとぼたもちを作り、神棚、仏様にそなえました。取り入れに使用した道具や、豊作に感謝し、収穫作業にたずさわった人たちを招きごちそうを食べ、労をねぎらいました。



こばし (鉄製の千歯扱)



動力臼搥の能率は目覚ましい  
 (『高森百年の写真史』より)

## ④ 「コバシ」とは



竹製の千歯扱

「コバシ」とは、割り竹を使って稲の穂を扱く古い道具のことで、麦や大豆の脱穀にも使われ、千歯扱とも呼ばれました。こばしができる前に使われていた扱箸よりもはるかに能率よく脱穀ができました。「こばしあげ」は、脱穀がすんだ収穫祭であり、新米で五平もちや牡丹もちをつくって祝います。



こばしをつかったの脱穀

### ぼた 牡丹もちとおはぎ

岩波書店発行広辞苑の「秋の餅」の項には、「もち米やうるち米などを炊き、軽くついて小さく丸め、餡・きな粉・ゴマなどをつけたもち。煮た小豆を粒のまま散らしかけたのが、萩の花の咲きみだれるさまに似るのでいう。また牡丹に似るから牡丹もちともいう。」と記され、呼び方の違いのみを指摘しています。季節によって春のものを「牡丹もち」、秋のものを「おはぎ」とする説や、もち米とうるち米のどちらを主とするか、小豆餡とこし餡との違い、餡ときな粉との違いによって呼び分けているという諸説があります。

# かん な づき 神無月

さくじつ  
11月朔日(1日、ついたち、たちび)

旧暦きゅうの10月を神無月かむづきといい、俗説ぞくでは、全国の神々が出雲大社に集まる月といわれています。また、旧暦10月中となる11月1日いづもを出雲大社へ出発する日としています。



赤飯のおにぎり

## たちびのおそなえ

町内の例では、神様にあつらえる(持って行ってもらう、預ける)ために、あずきあずご飯(赤飯)を丸くにぎったおにぎりや一升しゅうますに家中のお金を入れ、家の神棚だなにそなえました。

収穫しゅうかくがたくさんあるように、良い縁えんに恵まれるように、お金がたまるようになどの願いをこめ、神棚おがを拝みます。この月は恵比寿講えびすこうもあり、月遅れおくの恵比寿様のお立ちとも言われています。



瑠璃寺るりの七福神

### 七福神とは

七福神=福・徳の神として信仰される7人の神様のこと。インド、中国、日本の異なる宗教(三国異教)の、七尊を一組とした七福神信仰は、室町時代に興り、日本独特の仏教色の強い信仰で庶民の間に広がりました。また、七福神が一つ船に乗る七福宝船は人の一生という人生航路に、最も望ましい旅路に導いてもらえるように祈り、願いを乗せた、人々の信仰心を絵にした縁起物となっています。

恵比寿:日本に昔から伝わる神様で、古くは航海の神、漁業の守り神として信仰されました。

大黒天だいこくてん:米俵いねわらの上に乗り、頭巾をかぶり、ふくよかで柔和な姿で打ち出の小槌こづちを持ち、肩に大きな袋をかついでいます。

毘沙門天びしゃもんてん:起源はインドで、鎧よろいと冑かぶとを付け左手に宝塔、右手に矛ほこまたは宝棒を持って、いきどおり怒る形相で古くは、軍の守り神として信仰されました。

弁財天べんざいてん:七福神唯一の女神で、起源となるインドでは河流の女神です。

福祿寿ふくろくじゆ:福(幸福)、俸祿ほうろく(大金)、長寿命の人間にとって最高の願望の三徳をそなえる中国の神。

寿老人じゅうろうじん:中国の伝説の神仙人。頭が長く白髪、団扇うちわと巻物をつけた杖をもっています。

布袋ぼてい:七福神の中では唯一実際にこの世に生きた中国の歴史上の人物で、半裸で太鼓腹を出し、日用品を入れた袋と杖を持ち、吉凶や天気を占って歩いたとされ大口を開けて笑っています。「笑う門には、福きたる」



「幸福を重ねます」一升ますに五合ますを重ね、財布を入れてそなえます

# しちごさん 七五三

子どもの成長を願い感謝し、男の子は5歳、女の子は3歳と7歳に、地元の神社にお参りします。11月15日を祝いの日としていましたが、今は11月中旬、家の都合に合わせて、祝い日としています。

子どもは着飾ったり、千歳飴をもらったりして、神社にお参りします。生まれてからの成長を感謝して、これからも健康で元気に成長するよう祈ります。



七五三・祝いの千歳飴

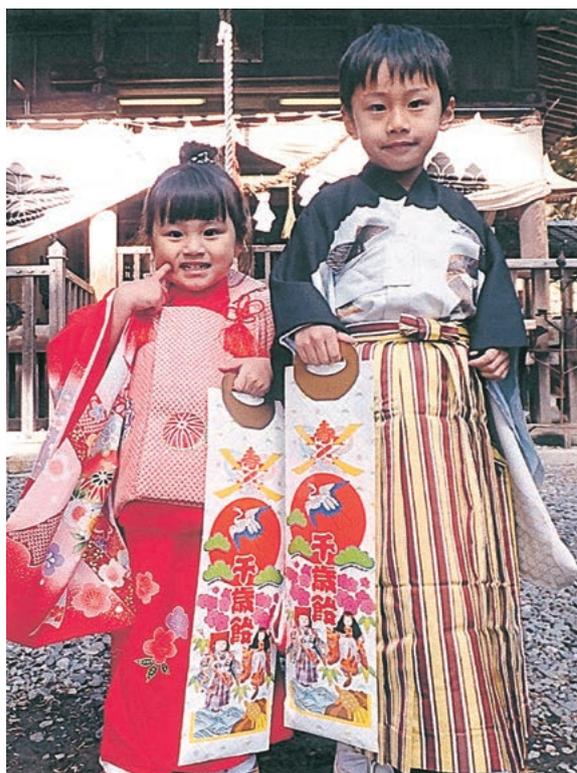
## ●子どもの成長を祝う、民間信仰

七五三は江戸時代に一般庶民に定着した祝いごとです。それまでは、武家の儀式として伝わっていました。明治以後、七五三と呼ばれ、子どもの成長を祝う行事となりました。

千歳飴は、子どもの長寿を願い、形は細長く、縁起の良い紅白となっています。粘り強く、細く長くの願いがこめられています。



神前に玉串をそなえ、健康ですこやかな成長を願って祝います



晴れ着の七五三もうでの子ども

# 恵比寿講・収穫祝い

え び す こう しゅう かく いわ  
にいなめさい  
 (新嘗祭)

旧暦10月20日に恵比寿を祭る行事で、新暦の11月23日の祝日（勤労感謝の日）を目安としています。

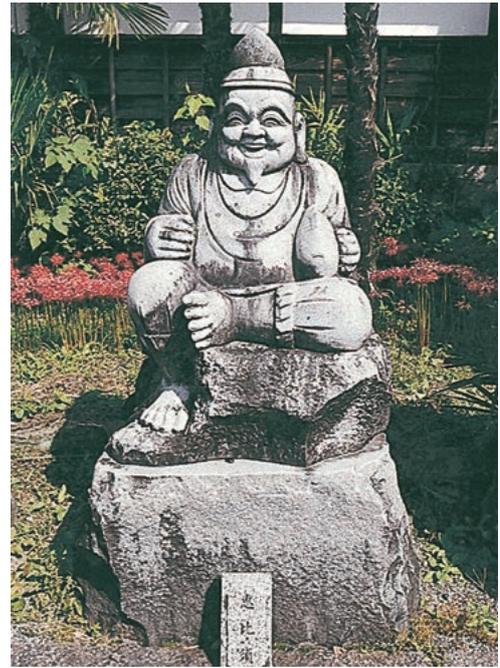
## ④ 商売繁盛と収穫祝い

町内の例では、商人が商売繁盛を願って、衣食住の日用品を安く販売し、互いの幸せを願いました。農家では、秋の収穫に安堵、感謝し、商店に買い物にでかけ、冬支度の準備にとりかかる目安ともしています。地元の商店街の他、飯田市の商店街は花火を打ち上げ、買い物意欲を盛り上げ、恵比寿講の縁起かつぎと言って、福引などをする近隣の買い物客で賑わいました。

また、11月23日は戦前の新嘗祭にあたり、一般農家では収穫祝いとして、ゆい仲間（助け合う仕事仲間）や近くの親戚、家内中が、各家順番で五平もちなどを作り、宴を楽しみ、豊作と健康であったことに感謝しました。ごちそうは地区での特徴もありますが、五平もち、七色野菜の煮物（大根、ニンジン、ゴボウ、こんにゃく、昆布、豆腐、さといも等）、しらあえが、代表的な料理として、もてなされます。

各家ではお祝をしなくなってきましたが、

地元の氏神に氏子代表者が今年収穫された新米をおそなえし、五穀豊穡を感謝しています。



瑠璃寺の恵比寿様



五平もち

### 五平もちの作り方 【材料(4人分)】

- ・米…4カップ・竹串…16本
- ・味噌だれ 味噌…60g くるみ…15g 砂糖…80g すりごま…10g 酒…少々
- ①米を普通に炊く。
- ②御飯が炊けたら、熱いうちにつぶし、団子にして丸める。(ピンポン玉くらいの大きさ)
- ③五平餅の形に抜いて、2個ずつ串に刺す。
- ④味噌だれは、分量の材料を合わせて火にかける。とろみがつくまで混ぜ合わせる。
- ⑤炭火をおこして、焦げ目がつくまで下焼きをする。
- ⑥味噌だれをつけて、再び炭火であぶる。



# とう じ 冬 至

冬至は二十四節気の一つで、12月22日ごろにあたります。一年のうちで一番昼の時間が短く、夜の時間が長い日です。この日にカボチャを食べると、中風にかからない魔よけになる、しもやけやひび割れにも効くと言われてきて、今でも多くの家庭でカボチャを食べています。

なすの枯れ枝、豆がらなどで風呂をたき、お湯にゆず(ゆず湯)やみかんの干した皮を入れると風邪を引かないなどと言われています。



平成29年12月22日 「御大の館」のゆず湯



「御大の館」の看板



冬至の日の入、明神橋から (平成29年12月22日 午後4時23分)

## 太陽の再生

冬至の翌日からは「米一粒ずつ昼が長くなる」と言うように、昼の時間が少しずつ長くなっていきます。この太陽の動きから、冬至は「太陽の力が再びよみがえる節目」とも考えられてきました。

### 冬至カボチャ

カボチャは、ビタミン豊富な夏野菜です。そんなカボチャを冬まで特別に保存しておいて、冬至の日に食べれば風邪予防になるという昔の人の生活の知恵が、冬至カボチャです。「冬至カボチャに年とらせるな」ともいい、これは「冬至がカボチャの食べ納め」であることを示しています。冬至カボチャのように、行事食には、食べものの食べどきや旬を確認させてくれるという意味をふくむものが少なくありません。

『日本の心を伝える年中行事事典』より



# おお はらい 大 祓

## (おおはらいまたはおおはらえ)

大祓というのは、宮中や神社で6月と12月の末日に行う人々の罪やけがれを祓い清める神事です。6月末日に行われるものを「夏越しの祓」と呼び、茅で輪を作り、その輪をくぐらせて人々のけがれを祓い清める神事が各地の神社で行われています。近くでは上飯田にある白山神社の茅の輪くぐりが有名です。

高森地区の神社では、6月と12月の両方で大祓の神事を行っているのは、吉田神社のみで、他の神社は12月の大祓のみを行っています。



人形の紙

### ④ 家族で行う大祓

この神事では、宮司さんに作成してもらった人形の紙を、自分の体の祓い清めたい部分に押し付け、その人形を集めて川へ流したり焼いたりします。本来は12月末日、つまり大晦日の行事ですが、直前の日曜日などにお宮のそうじとともにしている神社が多いようです。

日吉神社がある大島山地区では、各戸へ人形が配られ、大晦日に行う家庭での大事な行

事になっています。写真のように、ある家では戸主から順番に人形をまわして、自分の体の部分で祓い清めたいところへ人形を押し付けて、その人形を川に流して祓う、ということが行われています。



自分の体の部分で祓い清めたいところへ人形を押し付ける



人形を川へ流す

大島山地区では、そのやり方が家々によって違いがあり、一人一人人形をこすり付けた後で、その人形へ自分の息を吹きかける家や戸主が女性となっているある家では、人形をまわすのではなく、その女性が家族一人ずつに人形を押し付けてまわるといったやり方で行っています。

# (付録) 高森町の民俗芸能

年中行事と民俗芸能は、密接に結びついて行われています。そこで、このページでは高森町で行われている民俗芸能を、平成6(1994)年3月に高森町教育委員会が発行した『高森町民俗芸能誌』にもとづいて紹介します。

## ●各地区の伝統芸能



瑠璃寺の獅子舞「大嶋山瑠璃寺開基九百年記念誌」より

地区 神社名	行われている伝統芸能				備考(特徴・見どころ等)
下市田 萩山神社	獅子舞	囃子屋台	浦安の舞		3人の子ども(松王・梅王・桜丸)が獅子をひきます。
吉田 吉田神社	獅子舞	囃子屋台	雅楽 浦安の舞	煙火	天狗と獅子との舞が独特で、煙火は町指定文化財です。
山吹・竜口	龍神の舞				公民館活動の中から生まれ、親と子の龍が勢いよく踊ります。
山吹・上平 白髭神社	獅子舞	囃子屋台	花踊り	おかめ踊り	子どもたちによる花踊りやおかめ踊りが可愛らしい。
山吹・駒場 子安神社	獅子舞	子供神輿	子安太鼓		子どもたちがにぎやかに神輿をかつぎます。
山吹・丸山 泰山神社	獅子舞	花踊り	おかめ踊り	狐踊り	太神楽と舞楽の獅子舞がうまくミックスして華やかです。
牛牧 牛牧神社	獅子舞	囃子屋台	義士踊り		忠臣蔵の四十七士の踊りは壮観で、町登録文化財です。
上市田 伊勢神社	囃子屋台				子どもたちが屋台を引き、笛・太鼓を演奏します。
大嶋山 瑠璃寺	獅子舞	陵王の舞			900年の歴史を持ち、舞楽系獅子舞の特徴を残す県指定文化財です。
出原 出早神社	獅子舞	おかめ踊り			後継者不足により、現在は休止中。
山吹・新田 諏訪神社	虎舞	子ども虎舞	狐踊り		古い歴史を持ち、迫力ある虎の舞が見られます。



大嶋山瑠璃寺 獅子頭



牛牧の獅子頭



下市田萩山神社の獅子頭



吉田神社の獅子頭



出原出早神社の獅子頭



山吹泰山神社の獅子頭



上平白髭神社の獅子頭



駒場子安神社の獅子頭



新田諏訪神社の虎頭



竜口の龍神

獅子頭の写真は『高森町民俗芸能誌』より

# 高森町の年中行事調べ (地区別)

空欄になっている箇所は、不確定のため空欄にしています。

月 日	12月25日ころから		
行事名	ススはらい	門松とり・門松迎え	オヤス・しめ飾り
下市田	12月中旬ごろから、竹の棒の先に笹をくくり付けて、軒下・外壁等の清掃を行った。	山から松の枝を切る。松は五段松か七段松を2本用意して、くい棒に縄で縛りつけた。	3区自治会・育成会・老人クラブが小学生を対象に相当以前から行っている。5・6年生になると上手にできる。
牛 牧		山から松の枝を切る。松は五段松か七段松を2本用意して、くい棒に縄で縛りつけた。	
上市田	12月中旬ごろから、竹の棒の先に笹をくくり付けて、軒下・外壁等の清掃を行った。	12月28日が良い日と言われた。(ひらく)中折れで幣束も作る。オヤス・しめ縄用のワラ(丈の長い緑っぽいもの)を用意する。すぐっておく。正月用なのでワラはたたいてはいけない。使用前に湿しておく。皆でオヤス・しめ縄・タイ等を作り、12月30日までに飾る。一夜飾りはきらわれた。材料は、松・竹・しめ縄・オヤス・紙で。材料の竹は各家に来る年神様に目立つように、競って大きな竹を使った。年神様は竹で一休みしてから家の中に入られると言われている。	
大島山	27日・29日、大そうじ。	門松・しめ縄・オヤス(上伊那は輪ジメ) そなえる場所…蔵・納屋・いろりやかまど(火を使う所)・荒神様(神の通る道) <b>【縁起(さいさき、きざし、前兆)】</b> 松・竹・(梅)・南天(難を転ずる)・常緑樹(広葉)・サカキ等	
出 原		暦で佳い日に門松を山から採ってくる。	25日~28日、オヤス・しめ縄などを作る。
吉 田	長いススはらい竹を準備して軒先や外壁を、家内は、はたき・ぞうきんなどで汚れを清めた。	区山などから、松の三・五・七段節で枝ぶりの良い枝松を探して伐って来た。	新しい稲わらをすぐり揃え、柔らかくしてオヤスやしめ縄作りを行った。
山 吹	長い棒の先に笹をくくり付け、軒や壁のススやくもの巣をはらう。	門松・竹を迎え、しめ縄・オヤス作りをし、幣束をつけ、飾り付ける。正月飾りは一夜飾りはきらわれ、30日夜までには飾り付けた。	

12月28日～31日		12月31日	
もちつき	暮れ勘定	年の湯	お年取り
29日は苦もちと言って避け、30日にもちつきを行った。もち米を蒸して臼に入れ、まず先に鏡もち用についた。主人がついて主婦が手返し。鏡もちをのし台で作し、その後あんころもち、きな粉もちとごまもちを作った。また、後日食べるように切りもちを作った。		大晦日には風呂に入り体を清めて新年を迎える。	ちそう(一部) 【尾頭付きの魚】イワシ・サンマ 【縁起物の9つ煮物】ジャガイモ・ゴボウ・ニンジン・大根・こんにゃく・チクワ・焼き豆腐・アブラアゲ・糸昆布
29日は苦もちと言って避け、30日にもちつきを行った。もち米を蒸して臼に入れ、まず先に鏡もち用についた。主人がついて主婦が手返し。鏡もちをのし台で作し、その後あんころもち、きな粉もちとごまもちを作った。また、後日食べるように切りもちを作った。			おせち料理には、エビ・黒豆・数の子・きんとん・小魚でたづくり、さらに畑の野菜を料理して入れた。お年取りは、一年の締めくくりとして最も豪華な料理。ブリを焼き、各種の煮物、そして具だくさんの年取り汁。中には刻み昆布・ニンジン・ゴボウ・大根・サトイモ・長ネギ等の野菜に豆腐を入れた。
27日、正月用もち米洗い。とぎじるはお風呂に入れてわかし、男衆が先に入る。おそなえ作り・嫁さん実家用・家使い・アラレもち・コバンもち・マメもち。29日は苦もちと言って、もちつきはきらった。朝暗い内から、3升一臼で5臼くらいついた。		早めに風呂に入る。	戸主の音頭で乾杯して、今年の反省などをしてごちそうを戴く。
29日は飾りそなえはしない(苦もちできらう)。もちつきは28日・30日。おそなえをとり、正月飾りをそなえる。			【年取り(感謝の心)】 たづくり・数の子・野菜のすまし汁(粕汁)・豆(五目煮)・ブリ(出世魚)
29日もちつきの準備をする。30日もちつきをしながら、門松を飾る。オヤスは神社・墓地などへそなえる。			年取りを行う。おそなえもち・お神酒などを床の間・神棚・仏様などへそなえる。そのあと家族全員でブリを食べながら年取りを行う。二年参りに午後12時前に出かけ、神社・墓地・氏神などへお参りする。
多くの家庭では、30～31日に石か木臼を使い、3臼を標準(一臼は3升)とし、おそなえもちが一番臼で主人がつき、その後は子どもや女性などがつき、切りもちとした。	12月31日は一年の貸し借りの清算日。		氏神(吉田神社)からいただいた新しい中麻・氏神様・福神様のお神札を神棚にまつり、おそなえもち・干し柿・神酒・塩・洗米・魚(イワシ)をそなえ、しめ縄にご神札を飾り付け一年の無事と家族の安泰に感謝した。年取り料理は、白米ご飯・ブリ魚・汁物はしょう油の味付けとし、7品(大根・ニンジン・ゴボウ・サトイモ・こんにゃく・うす昆布・豆腐)を煮つけて食することとした。
もちつきをし、おそなえもちを12かさね作り、床の間へ用意する。みかん・干し柿をのせ、元旦の朝、それぞれの神様(天照大神・えびす様・仏様・荒神水神様・天神様)へしんぜる。			夕方より神々様・仏様にお洗米・塩・鏡もち・御神酒・ご飯・年取りの煮物をそなえ、燈明を上げ、家族全員いっしょに年取り酒をいただく。

月 日	正月1日 元旦		
行事名	若水・福茶	かまど神	初詣・神参り
下市田	神へのそなえ物、人の食物を煮、口をすすぎ茶を入れる。 元旦の朝、一年中の災難よけ。男子が水を汲み、茶の用意。	元旦の朝は豆がらでたきつけ、かまどの神を祭る。火は神聖なもの。	うぶすな神・先祖神・皇大神・年神様を拝む(豊年と繁昌を祈る神)。 朝、うぶすな様・先祖様・山神様等にお参りする。
牛 牧	朝、家中で一番若い男性が水を汲んできて、豆がらでお湯をわかす。		牛牧神社・末社・枝宮へお参り。 初日の出遥拝。
上市田	一家の主人が一番先に起きて若水(一年の始めに最初にくむ水)をくみ、まめで暮らせるようにと、豆がらでお湯をわかして、お茶の準備をする。 家族全員が集まって新年の挨拶をして若水をわかしたお茶を皆でいただく。		除夜の鐘を聞きながら初詣。伊勢神社では御神酒をいただいて破魔矢・お札を買う。これらは次の年のほんやりまで飾る。大豆と洗米をおひねり袋に入れて持っていき、お宮にそなえる。(最近はお金を持って行く。)
大島山	湯をわかし、福茶を入れる。		区民総出の総礼の行事。
出 原	戸主が若水を取る。	豆がらをかまどで燃やして一年の息災を祈る。	
吉 田	元旦の朝一番、主人が初水をやかんに汲む。豆がらで火をつけわかし、お茶をたて、神棚にそなえる。 一家そろって「新年おめでとうございます。本年もよろしく願います。」の挨拶をしてお茶をいただく。		土地の氏神様・産土神などにお米を少しずつそなえながらお参りする(氏神様から福をいただく)。家族の健康、子どもの成長、農作物の豊作など身近なことを祈願する。
山 吹	元服を過ぎた一番若い男の人が若水を汲み、仏様へそなえる。 豆殻、鬼木で火をたき、湯をわかし、歯がためのお茶に使う。 子どもたちにお年玉をあげる。		年取り前にそなえたおそなえもちの上へ、みかん(だいだい)と干し柿をそなえ、灯明にあかりを灯す。家族それぞれ起きたら家長へ順番に年頭の挨拶をし、神々に礼拝する。 <b>【二年参り】</b> 神社・氏神様・菩提寺・お墓参り・本学神社へオヤスを持って行き、礼拝する。

正月1日 元旦				
歯固め・お茶菓子	雑煮	屠蘇	年始廻り	その他
男子がお茶を用意する。柿・栗を食べる。柿の種は小判。	もちは「五臓（体の大切なところ）」を丈夫にする。	元旦に飲めば、一年中、無病で暮らせる。酒に5種の薬草を入れる。	寺・神主・役人・近所・親せき等へ。手土産は、もち・するめ・風呂敷。何日もかかる。	初日の出を拝む。
煎った大豆・干し柿などを食べる。種が多いほど縁起良し。	雑煮でもちを食べる（しょう油汁）。大根はひょうし切り・ニンジン・昆布・豆腐・数の子・たつくり。		寺・仲人親・親せき等へ手土産として、もち。	この日は家事道具は休ませる。火は使用しない。
年の始めに初めて物を食べて歯を固めるということ。食べる物は決まっています。豆・栗・干し柿であった。まめでくりくり働いてかき取れるようにという。食べた柿の種が多いとお米が多く取れるとか、お金が多く入ると言って喜び合った。	歯がためをし、お茶菓子を食べた後、神棚・仏壇・床の間にお神酒・お雑煮をそなえ、お神酒をいただき、お雑煮の朝食をとる。			福の神が入るように朝早く戸を開けた。入ってきた福の神が出て行かないようにと、おそうじはしない。また、道具は一切使わない。
豆でクリ栗、柿とる。	すまし汁の雑煮。		子どもたちは、学校から帰ってきて年始まわり。	一年の計は元旦にあり（何事も計画を立ててあたるべし） 福がにげるので、そうじはしない。
家族全員で新年の挨拶をし、歯固めといって豆・栗・柿等を食べ、お茶を飲む。柿は種子が小判に似ているので、その数で本年の収入などを占う。昔はくずを道にまいて他人にふんでもらい、歯を丈夫にすると言ったが、今は環境上やらない。			障子紙とするめを持って行った。それがあちこち回るので、しまいには障子紙が少し汚れたりしていた。	
家族そろって、豆・干し柿・栗を食べ、お茶を飲む。「まめでくりくりかきとるように」と、干し柿の種の数で、この年を占う（種が多い方がよい）。	もちを焼き、さいの目（三つ切り）に切った大根・ニンジン・ゴボウ・サトイモ・昆布・豆腐・こんにゃくをしょう油汁で煮付けていただく。	御神酒をいただく。	学校で年始式をして、家に帰って遊ぶ（カルタ・みかん引き・羽根つき・縄跳びなど）。仲人などの挨拶まわりをする。	<b>【初日の出】</b> 新年最初の太陽を拝み、一年の幸福を祈る。（平成に入り、山を歩こう会が中心になり、吉田山へ希望者を募って登り、山でお雑煮を食べた。）元旦は、そうじ、洗濯はしない。
家族そろって歯固めのお茶をいただく。 <b>【豆・栗】</b> 勝ちぐり <b>【干し柿】</b> 種が多いほど収穫が多いと喜ぶ	お雑煮をいただく。神々にもおそなえする。ニンジン・ゴボウ・大根・こんにゃく・サトイモ・豆腐・昆布の汁におもちを入れる。	お屠蘇で祝う。黒豆・大根とニンジンのなます・たつくり・数の子・昆布巻き等		初日の出を拝む。

月 日	正月2日	正月3日	1月4・5日
行事名	こと始め	恵比寿開き 恵比寿=おいべす・おいべつ	女正月 (寝正月)
下市田	初湯 (初風呂)。 書き初め・買い初め。 イモのすり初め・初売り・初夢・縫い初め・縄ない初め。	恵比寿様・大黒様を祭る。 神棚へ、福縄・扇子・麻をそなえる。	
牛 牧	【すり始め】 長イモをすって食べる。	【おいべつ様】 恵比寿・大黒の正月行事。 一升ますに白米・切りもち3個・イワシをそなえる。当主のがまぐちをそなえる。 福縄を編み、丸扇を飾る。	正月3日間は大変忙しいので、料理をする女の人をねぎらおうと、お互い訪問し合うのをやめて、お客さんのない日とした。
上市田	【買い初め】 朝早く起き近所や飯田町に買い物に行く。 【すり初め】 朝食には長イモをすって、ご飯のおかずにした。(ねばり強く頑張れるように) 【仕事始め】 農機具の手入れ、わら草履・福縄作りなどした。 【書き初め】 毛筆で習字をする。書いた清書はほんやりの時に納めた。 【なべ借り】 初嫁さんが実家に帰って、なべを借りて料理を作り親にごちそうする。	恵比寿様が帰ってくる。床前にオズサ (麻を細かく裂いたもの) をかざる。(長寿祈願の願い) おいべす様の鯛 (ふく縄) をそなえる。朝食に小豆ご飯を炊いて神棚にそなえ、皆でいただく。現在持っているお金すべてを、まずに入れておそなえる。	正月3日間は大変忙しいので、料理をする女の人をねぎらおうと、お互い訪問し合うのをやめて、お客さんのない日とした。
大島山	【買い初め】 (売り出し) 初荷出荷。 【すり初め】 長イモをすって食べる。 【書き初め】 【仕事始め】 農機具や用具に手をつける。	恵比寿様と大黒様。 家が栄え、福がたくさん来るように。	料理する女の人を休ませる。
出 原	買い初め・切り初め (選定作業)・緋初め (福縄)・縫い初め・その他の仕事ははじめを少しずつ行う。 すり初めで朝食に山イモをすってごはんと一緒に食べる。	恵比寿様の飾りつけを行う。 円状の扇に麻を垂らし、灯りを上げる。 朝食に小豆飯 (うるち米に小豆を入れて炊く) を食べる。前日作った福縄を飾る。 年始回りに親戚などへ手分けして出掛ける。	
吉 田	仕事始めとして、稲ワラをおいべつ様にそなえる。 鯛・わらじ・草履、また3日の福縄などを作る。 【書き初め】 年が明けて初めてする習字。めでたい言葉、今年の抱負等を書く。小中学生は正月休みの宿題になっているか。 【すり初め】 朝食に長イモのとろろご飯を食べる。 【初買初め】 朝早く近隣の店に買い物をした。 【初 湯】 わかしてまず神佛に入ってもらおう。	この日はおいべつ様をまつ。恵比寿大黒の神棚に福縄を吊るし、鯛2尾に祝い扇子と麻を長くたらし飾り付ける。赤飯を炊く。小豆ご飯のお膳をそなえる。一つのお膳に2組のご飯・お汁・イワシのお頭付きを向かい合うように盛りおそなえる。汁ははまぐり貝の汁にする。手持ちのお金を一升ますに入れ、そなえる。	松の内に忙しく働いた主婦をねぎらう意味で、休み日とした。
山 吹	【仕事始め】 わらをたたき、荷縄一段 (6本。刈った草を縛るのに使う) をあむ。福縄を作る。(えびす・大黒様) 【すり初め】 山イモをすり、朝食にイワシの丸干しとご飯をいただく。 【買い初め】 年が明けて初めてお金を使う。(元旦に使い始めると年中出てしまうとか) 【書き初め】 子ども等は習字をする。	福縄・祝い扇子・麻・イワシの腹合せ2尾・福神に進げる。 二年参りにいただいたお札も進げる。	

1月6日	1月7日	1月7日または1月14日
六日年・ほんやり準備	七草粥	ほんやり
六日年を取る。仏様が年を取る。	唐から大摩鳥渡り、人々に毒の気をかけるので七草の粥を煮て食べると病気をしない。 七草を切板の上で、包丁でたたき、唱える。「七草なずな、とうとの鳥が日本のうちへ渡らぬ先にあわせてばたばた」	昔は14日だったが、今は7日。火祭り、神を喜ばす。書き初めが上ると腕が上がる。火にあたり、もちを焼いて食べると一年中無病。燃え残りを屋根に上げると雷が落ちない。火災にならない。15日の粥をたきつける。
朝の行事。しょう油のした汁で白飯（正月の残り物）を食べる。	前日の夜に七草をきざむ。七草の入ったお粥を食べる。	竹の先にもちをさして焼く。 ほんやりの火で焼いたもちを食べるとその年は健康で過ごせると言われる。 7日早朝、子ども達が「ホーホ、ホーホほんやりホーホ、ほうぼのおやじ、もち持って来いよ」とはやし唄で呼んで回った。
仏様が年を取るという意味で、六日年という年取りをした。	七日正月と言って仏様の正月をした。 【七草粥】6日の夜、神棚の前で『七草なずな 唐土の鳥が日本の土地へ渡らぬ先にあわせてバタバタ』と何回も唱えながら、トントンときざんだ。7日の朝、ほんやりで焼いたもちと七草を細かくきざんで入れたお粥を食べ、仏様にもそなえて無病息災を祈った。初春に芽を出した若草の生命力を身に付ける。	14日朝6時点火。正月の松飾りや前の年の正月から飾られていた恵比寿様のお飾り・ダルマ・神様の御札を納める火祭りをほんやり様と言った。拍子木を叩きながら歌って回った。「ホーホホーホ ホンヤリホーホ、ホンヤリドノオンバカハ イズモノクニ ヨーバレテ アトデエヲヤーヤカレタ」火にあたり、けむりにまかれてもちを焼くと夏病みしない。焼けた松の枝を持ち帰り、屋根に上げると火事にならない。
仏様の年取り	ほんやり（どんど焼き）で焼いたもちを七草粥に入れて食べる。 【春の七草】 ゴギョウ・ハコベラ・ホトケノザ・スズナ・スズシロ・セリ・ナズナ	ほんやり様は、大正月に飾った松や竹と前年の神様に関したものを集めて、13日に子ども達が作り上げた。 14日早朝に火をつけて焼き上げた。
七草を採ってきて、夜、床の間の前で刻む。次の唄を歌いながらきざむ。 「七草なずな ななくさとうと とうとの鳥が日本の国に渡らぬうちに 追われてバタバタ」 ※とうとは朝鮮のことか？鳥インフルエンザが昔も恐れられていたものと思われる。 7日、朝食に七草粥をいただく。門松などはずして、ほんやりに出す。		前日の14日、おんべを作る。番小屋を作って上級生が泊まり込む。 15日、暗い内に呼び合い、おんべに火をつける。もちを焼く。 厄年の人は、茶碗にお金を入れておんべに投げつけてにげてくる。茶碗が割れると厄が取れる。
年末の年取りにならっておそなえし、年取りをする。大正月の門松などのおそなえをさげる。朝から子ども達が、各家々から材料（竹・門松・青木）を集め、ほんやり作り。作り終わるとむしろ等で小屋を作り、朝まで泊まる。 7日の朝に春の七草（根ものは石ころ、葉ものは細かく切り）を入れたお粥を食べる。病気や災いをはらい、一年を健康に過ごせると言われている。また、お正月のごちそうで疲れた胃腸を休め、野菜で栄養をとると言われている。		ほんやりの火で焼いたもちを食べるとその年は健康で過ごせると言われる。 7日早朝、子ども達が「ホーホ、ホーホほんやりホーホ、ほうぼのおやじ、もち持って来いよ」とはやし唄で呼んで回った。
朝、六日年を取り、神々にそなえ、食事の後、門松等、正月飾りをおろす。 七草を揃え、夜、床の間の前で、まな板の上で包丁でたたき、唱える。（病気、悪魔ばらいをする）「七草 なずな 唐土の鳥が 日本の国に渡らぬ先にあわせてバタバタ」 7日の朝、七草粥をいただく。昨夜たたいた七草を入れる。味噌汁に七草とサトイモ・大根・豆腐をさいのめに切ったものを入れる。		子ども達は前日のうちに広場へ正月飾りを集め、おんべを作る。朝、部落の人達を集めて焼き、その火でもちを焼いていただく。ほんやりの火に当たると一年中病気にならない。 燃え木じりをいただくと火事にならない。 習字の紙が高く上がるほど字が上手になる。

月 日	1月11日・12日	1月13日
行事名	鏡開き (おそなえ開き)・若木迎え・初山 (おやまもうし)	小正月 (百姓正月)・飾り物・もちつき
下市田	<p><b>【鏡開き (おそなえ開き)】</b> おそなえをおろし、雑煮にして食べる。 小正月の支度。</p>	<p>子ども・女の人の正月、農作物の祭り、豊作を祈る。 <b>【もち花】</b> 稲。しでの木の枝につける。 <b>【粟 穂】</b> 粟。竹の枝の先へ。 <b>【まゆ玉】</b> 蚕。粉もちでまゆ玉を作り、びんかの木に付ける。</p>
牛 牧	<p><b>【鏡開き (おそなえ開き)】</b> 神棚や床の間等にそなえたおそなえを下げて雑煮にして食べる。 <b>【若木迎え】</b> たきぎ取り初め。山神に無事を祈る。</p>	<p>もちをついて小さく四角いもち花を作って、笹竹の枝にさし、米俵に立てた。米を石臼でひいて作った米粉を水で練り、まゆの形に作って皿に積み上げ、お膳にのせて、米俵の前に置いて飾った。 <b>【小正月飾り】</b> まゆ玉・稲穂をコナシまたはピンカにさす。鏡もちも作る。 14・15日もち入りお粥を食べる。ヌルデの木を2つに割り、12月と書き、家中の出入り口に飾る。</p>
上市田	<p>お正月に神棚等にそなえたおそなえを、1月6日に下げて、11日に焼くか雑煮にして食べる。 昔は1月中に一年分のたきぎを取り蓄えていた。太いたきぎを小正月に飾る大根本用に、ヌルデなど火にあわない木を鬼木用に、ツゲやピンカをまゆ玉用に取ってきた。</p>	<p>13日早朝にもちつきをし、鏡もちやのしもちをつくった。<b>【もち花】</b> ついたもちをサイノメに切り、竹の枝の葉をとってさした(稲穂が頭を垂れているように)。豊作を願う。<b>【柿玉】</b> 粉もちをお団子より少し大きくした形に丸め、ソヨゴかピンカの枝につける。熟柿に見立てたミカンも飾る。<b>【まゆ玉】</b> 粉もちをまゆの形にしてピンカの枝にさした(昔はピンカの枝に蚕を放してまゆを作らせたと言われている)。飾り物は、石臼か米俵2つを台にしてお勝手か土間・大黒柱の所に飾った。</p>
大島山		<p>竹にもち花をつけ、ソヨモにまゆ玉をつけて、柱に結えつけるか、俵にさして飾った。</p>
出 原		<p>13日から16日まで。13日は「おものかざりい」と言ってまゆ玉を木々にさして飾り付けを行う。 <b>【まゆ玉飾り】</b> 米は3升3合とし、「産々」「養蚕」にあやかる。 <b>【もち花飾り】</b> おそなえもちの一部を使う。</p>
吉 田	<p>大正月におそなえしていた鏡もちをたたいて割り、お雑煮やお汁粉にしていた。</p>	<p><b>【もちつき】</b> 小正月飾り・鏡もち・もち作りを行う。 <b>【もち花やまゆ玉飾り】</b> 米粉をこねて、もち花(紅白)・まゆ玉を作り、竹の枝にさして花のように飾る。これは稲の花を表し、穀物の豊作を願う。また、まゆ玉は養蚕農家のまゆがたくさんできるようお願いして床の間に飾り付けた。 小正月は、松の内に忙しく働いた主婦を労う意味で「女正月」とも言われる。</p>
山 吹	<p><b>【鏡開き (おそなえ開き)・蔵開き】</b> おそなえもちをお雑煮やお汁粉にしていた。 <b>【鬼木迎え】</b> 山からヌルデを伐ってくる。笹竹を伐ってくる。</p>	<p><b>【小正月飾り】</b> 2本細い枝を6本ずつわらで縛って、納屋・道具部屋へ進げる。 <b>【もちつき・まゆ玉作り】</b> 竹へもち花をさして床の間に飾り、神棚・台所へも飾る。まゆ玉(米の粉を練りまゆの形に作る)を榊・お膳(三方)へ飾る。</p>

1月13～14日	1月15日	1月15日
厄年・厄落し	鬼 木	あずき粥
	災いの鬼を払うため、また魔よけのため、門に木を積み、よせかけておく。	蚕の豊作を祈る。粥を吹いて食べると大風が吹く。18日に食べると、毒虫にさされない。
		蚕の豊作を祈る。粥を吹いて食べると大風が吹く。18日に食べると、毒虫にさされない。
男女とも厄年にあたった人は、13日の夜から14日の朝方にかけて、暗いうちに家を抜け出て自分の年の数だけ持ってきたお金（お金の代わりに大根を輪切りにしたものを使った）と、自分で使っていた茶碗を村の四辻へ投げ捨て後ろを振り返らずに家にもどる。もし人に見られたり、後ろを振り返ると厄は落ちない。	大正月にオヤスをそなえた所に飾る。割れやすい木を2つに割り、炭で12本横線を引いたり、十二月と書く。鬼を迷わせて魔よけの意味。	
厄落としを14日の夜半に行った。自分の使っていた飯茶碗へ、大根の切ったものと銭を自分の年の数だけ入れて、ほんやり様の場所へ強く投げつけ、人に会わないようにして家にもどった。		
	15cmくらいに切った樹木（宮島家ではリョウブの木を使う）を2つに割って一方に十二月と書き、もう一方に12本横に線を引き、一對づつ添えて飾る。もち米を蒸す時に出るオキの付いた小枝を墨代わりにして書く。閏月は十三月と書く。	
	ねむの木を2つ割りし、十二月と墨で書き、門松を立てた所に左右に置いた。（一年間、家族の健康、子どもの成長など願って立てた。）	粥を吹かずに食べる。吹くと風がふく。
	鬼木は太い木を割って内へ十二月と筆で書く。 <b>【お新木（オニギ）に十二月と書く意味】</b> 12月の内に一年間たくたきぎができておりますと神様に報告する意味がある。小正月が終ると屋根裏などに置き、昔は戦争に行く時や長い旅に出る時などにたいてお湯をわかし、梅でお茶を飲んで出かけた（魔よけになるとのこと）。今は受験・進学・入学・入園などの時に使用する。	あずき粥をいただく。 <b>【お粥占い】</b> 鬼木を1月から12月まで並べて、そのたけ具合いで一年間の天気を占う。

月 日	1月15日	1月15日・16日・17日	1月20日
行事名	鳥追い・成り木責め (柿木祝い)	小正月・やぶ入り・お物修め	二十日正月・おまゆ練り・ 鬼木占い・もち花炒り
下市田	【鳥追い】 めるでの木で竹ぼうきのようなものを作り、地面をたたく。唄を歌って害虫を追う。唄「阿波の鳥もホーホ、吉備の鳥もホーホ」 【成り木責め】 果樹に刃物で傷をつけ、「なるか、ならぬか、ならねば切るぞ」「なります、なります」と問答して豊作を願う。	【まゆねり】 正月十六日。まゆ玉ともちを煮て食べる。 【餓鬼の首】 この日は地獄の釜のふたがあく日。年に一度だけ休む日。(職人・女中・丁稚さんなど)	休日、家中仲良く遊ぶ。 鬼木を焼き、まゆ玉・もちを焼いて食べる。
牛 牧	【鳥追い】 ヌルデの木で竹ぼうきのようなものを作り、地面をたたく。唄を歌って害虫を追う。唄「阿波の鳥もホーホ、吉備の鳥もホーホ」 【成り木責め】 果樹に刃物で傷をつけ、「なるか、ならぬか、ならねば切るぞ」「なります、なります」と問答して、木の切り口へ粥を塗り豊作を願う。	もち入りの朝粥を食べる。豊作祈願の朝食。熱くても吹かない。風害からのがれる。 小正月飾りを片付ける。 【餓鬼の首】 16日、多忙な正月行事の一段落のため休息日。	女衆の正月。朝食にゆでたまゆ玉を小豆と大根でしる粉で食べた。囲炉裏で鬼木を燃やし12ヶ並べその炭で今年の月別の天候を占った。稲穂のもち花と大豆・屑米を炒ってしょう油で味付けし冬場の保存茶菓子とした。
上市田	【鳥追い】 男の子が拍子木をたたきながら五穀の鳥を呼びながら歩いた。 【成り木責め】 ナタで柿の木に傷つけ、持ってきたお粥を傷口に塗り付けた。 【モグラ追い】 天秤おけを持ち出して、おけの縁を天秤棒でこすっていやな音を出してモグラが来ないようにした行事。	【やぶ入り】 丁稚や女中さんが年に一度だけ家に帰してもらえた休日。	【二十日正月】 もち花・まゆ玉・柿玉等片付け、焼いたり炒ったりして食べる日。年始回りも遅くとも20日までに義理を済ませる。
大島山	【鳥追い】 子ども達が拍子木を持って、歌を歌いながら野道を回って歩いた。		夕食に「おまゆねり (オメエネリ)」と言って、まゆ玉を汁に入れたり、しる粉に入れたりして食べた。
出 原		【道具休み】 14日は職人さんをはじめとして、農家も仕事を一切しなかった。 【餓鬼の首】 16日は罪人も天下晴れて休める日。	年越しから正月・小正月と忙しく働いてきた女の人が休める日。お嫁さんは一日実家へ帰ることができた。
吉 田	【鳥追い】 【成る木責め】 柿の木に刃物で傷をつけて、「なるか、ならぬか」問いかけ収穫を願う。		女正月、松の内に忙しく働いた主婦を労う意味といわれている。 まゆ玉でしる粉を作り食べる。(女の寄合)
山 吹		【餓鬼の首】16日、休日。この日に仕事をすると怪我をされると言われる。(餓鬼の首も許されるという日) 【まゆねり】16日、まゆ玉をしるこにして食べる。もち花は竹からはずして油で揚げてはぜもちにする。 【ツク】17日と言ってこの日もお休み、生家に帰ったお弟子さん、奉公人の人達が勤めにもどる。	二十日正月は女の正月。正月中、お客様の接待・食事作りの疲れをいやすため、実家へ休みに行くことも多い。

2月1日	2月3日	2月の最初の午の日	2月8日 (関西は12月8日)	3月初旬
おそなえ開き	<b>節分</b> 旧暦立春の前の夜で一年中の厄をはらい、魔よけをして年神様を迎える。	初午 (初午祭り)	針供養(無実講)	荒神払い・水神様の祭り
	炒り豆(大豆)をますに入れ、神棚にそなえる。夕刻、戸・窓を開け、「福は内」「鬼は外」と唱えてまく。豆まきは男(家長)、家中の者は年齢の数だけ豆を握りとって食べる。同じ数だけ握れば大吉。夕飯は白飯、煮物豆腐ものなどのごちそうに鯛頭付を食べて立春を迎える。 【恵方巻き寿司】 恵方とは年神様が訪れるという大吉の方角。家族で同じ作りの寿司を食べて、立春を迎える。	蚕玉明神が天から下って来る日。朝早く青葉でいぶす(その煙に集まってくる)。ぼたもちを作って12個重箱に入れてそなえた。	豆腐に折れた針をさす。豆腐を食べると無実の罪が晴れる。	
	大豆を煎って「鬼は外」と言いながら外へ豆をまき、「福は内」と言って廊下や部屋の中にまいた。その後、自分の年の数だけ豆を食べ、健康を願った。 「蟹柎・かにかや」と書いた紙を玄関・戸口・入口などに貼る。本来は、たつくりカイワシの頭をヒイラギの枝にさして魔よけとしてつり下げる。			蔵・納屋・かまど・トイレ・氏神様等の幣束を新しくする。
	「蟹柎・かにかや」と書いた紙を玄関・戸口・入口などに貼る。本来は、たつくりカイワシの頭をヒイラギの枝にさして魔よけとしてつり下げる。夕方大豆を炒り鍋で炒ってますに入れて神棚にそなえ、お年取りをする。ますの豆を上座敷からまいて「鬼は外、福は内、福は内」と大声で唱えてまく。豆を自分の年の数だけつかんで食べる。残った豆を神棚にそなえておき、雷が鳴った時に食べると雷が落ちない。		曲がったり折れたりした針を、こんにゃくや豆腐にさして感謝した。	厄除け・災害避けの祭り。行者を呼んでお蔵・荒神・氏神様などの御神体(幣束)を新しくする。
	【魔よけ(かにかや・カニカヤ)】 わらの筒の中へコショウ・頭の毛・ニンニク等の強い臭いのするものを入れて焼き、魔よけとした。 白飯に野菜など五色か七色の物を入れた汁を作り、年取りをした。	青葉をたいて煙を出し、蚕玉様を迎えた。		2月下旬に天神様祭りを行っていた。
	煎った豆を入れた一升ますを神棚にそなえ、夕食後、戸主を先頭に子どもたちがあとについて座敷から順に豆をまき、外へは強くまいて鬼を内にいれないようにすぐに障子を閉めた。その後、こたつでますに残った豆の中から自分の年の数になるように一握りで取出して食べた。「かにかや」「蟹柎」と書いた紙も戸口の柱に貼り付けた。			
小正月のおそなえもちで、しる粉を作る。	夕食後、豆を炒って一升ますに入れて神棚にそなえた後、主人がおろし、戸間口・各部屋・台所の順に「オニワソト、フクワウチ」と言いながら初めは戸外にまき、戸を閉めて家の中にまいた。年の数だけ豆を食べた。 「かにかや」と書いた障子紙を家の入口に貼った。(長屋・便所・土蔵などに貼る)			2月下旬、吉田の城山の天神様に、子ども達が出て、吉田の光専寺の門をくぐり、きおい、お祭りをする。
小正月のおそなえ開きをやっている。	厄よけとして「かに、かや」と書いた紙を家の入口に貼り、豆まきをする。「福は内、福は内、鬼は外」年男、年女等とする。すぐに戸を閉める。年齢の数だけ豆を食べて厄ばらいする。節分の豆をとって置いて初雷の時に食べると、落雷の難からのがれられるという。カヤの木の枝を炊いて豆炒りをする。悪臭と煙を出すのを虫の口焼きという。	ぼたもちを作って食べた。そのご飯は、小正月飾りの稲・まゆ玉の竹・そよも・お新木などで炊き、ぼたもちを蚕玉様にそなえた。	昔、豆腐に折れた針を刺して供養した。	荒神払い・水神様の祭りで神主様・お寺様に拝んでいただく。

月 日	3月15日 (2月15日)	3月18日～24日	4月3日
行事名	ヤショウマ	春の彼岸	ひな祭り・桃の節句 (月遅れ)
下市田		お墓参り、ぼたもち（ぼたんの花から）や天ぶら饅頭（座光寺饅頭を半分にして使った話あり）をそなえる。	お嫁さんの生家からいただいたおひな様を飾る。飾らないと婚期が遅れると言われた。
牛 牧	女性達がお釈迦様の掛軸やお菓子を持ち寄り、そなえる。		お嫁さんの生家から贈られたおひな様を3月に入ると飾る。内祝い・ひしもちと甘酒をそなえる。
上市田		お墓のそうじ。 花がないのでネコヤナギなどをそなえて墓参りをする。	土手のヨモギを摘んで草もちをついた。お嫁さんの生家からいただいたおひな様を飾った。早くから飾り、娘が縁遠くならないように節句が終るとすぐに片付けた。
大島山		ぼたもちを作り、墓参りをする。そなえる花はネコヤナギが主だった。	
出 原		お墓参り。ぼたもちを作る。初彼岸の家に手土産を持っていく。お返しにぼたもちをくれる。	初節句には、お嫁さんの生家から贈られたおひな様を飾り、近い親せきをお客に招き、草もち・甘酒を作ってふるまう。
吉 田		彼岸入り前にお墓を清める。祖先を敬い、花・お米をそなえ墓参りをする。ぼたもち(きな粉・あんこ・ごまを使う)を作り食べる。初彼岸の家では、親族が集まり、仏を供養する。	初めて女の子が生まれるとお嫁さんの生家からおひな様が贈られた。3月に入ると飾り、初節句の家では両家の両親と仲人を呼び、内祝いをして子どもの成長を願った。ひしもちと甘酒をそなえた。ひしもちには白もち・紅もち・ヨモギもちの三段が重ねてあった。
山 吹	お釈迦様の亡くなった日に集まり、お参りをする。米の粉を練り、食紅を加えて作ったものをお花もち・ヤショウマといい、仏様にそなえる。	先祖を敬い、墓参りをする。春はぼたもちを作って食べる。天ぶら・うどん等を仏壇にそなえる。	女の子の幸せを祈る祭り。おひな様を飾って、もち・草もちをつき、ひしもちをそなえて、甘酒をいただく。

4月8日 (5月8日の地区が多い)	5月5日
花祭り 釈迦の誕生日	端午の節句・ショウブの節句 6月中旬や6月5日に行う地区もある
お寺で甘茶をもらった。 竹さお（3mくらい）の先にツツジ・ウツギの枝と花をしばりつけて庭先に飾った。	男の子の健康と成長を願う行事。のぼり・鯉のぼりを揚げ、五月人形を飾る。 <b>【おそなえ】</b> かしわもち  屋根にショウブ・ヨモギをさす。ショウブ湯の風呂に入り、ショウブでハチマキをする。
牛牧神社の境内で、小さい釈迦像にシャクシで甘茶をかけ、また、その甘茶をいただいた。	のぼりはお嫁さんの生家で購入し、贈ってくれた。勇壮な武者絵を描く。上方に当家の家紋（黒）とお嫁さんの生家の家紋（赤）を入れる。 そのとなりに鯉のぼりを立てた。両親を意味する黒鯉・赤鯉と子ども鯉。  6月5日、健康を願う。ショウブやヨモギを屋根のひさしにさし、風呂に入れた。
5月8日に行う。 各組合当番で前日7日、屋形を花で飾り、甘茶をわかす。当日、屋形の中にお釈迦様を入れ、甘茶をかけてお参りする。立派なお釈迦様の涅槃図があり、当日飾ってお参りする。各家庭では、ツツジとウツギを採ってきて、棒の先にくくりつけて飾る。	男の子の祭り。長男の初節句の時、お嫁さんの生家・近い親せきから座敷のぼり・人形・鯉のぼり等を頂き、庭・床前に飾る。  玄関・各棟のひさしにショウブともち草を組んでくくりつけたり、さした。ショウブともち草を風呂に入れてショウブ湯に入る。（頭の病にかからない。風邪をひかない。風呂から出る時、ショウブでハチマキをして出てきた。）
灌仏会。	ショウブとヨモギを屋根の軒に2本ずつさす。ショウブ湯を仕上げ、ショウブでハチマキをした。
お寺でお釈迦様の像の小屋の屋根に花を飾り付ける。像に甘茶をかける。子どもは甘茶をもらいに行く。	初節句にはお嫁さんの生家が作ってくれたのぼりを4月中から立てる。仲人や親許などを招き、お祝いする。赤・かしわもちを作る。  ショウブとヨモギを取って来て屋根のひさしにさす。ショウブをトックリにさして神棚に飾る。風呂にショウブを入れ入浴する時、頭にショウブを巻くと頭痛がしないという。
5月8日、光専寺のほか、本島家内の庵で行っている。花で飾ったお堂があり、甘茶の入った器の真ん中にお釈迦像があって、ヒシャクで甘茶をかけ、子どもたちはビンを持ち寄り甘茶をもらい楽しんだ。	初の男子誕生は家系が絶えないと喜び、お嫁さんの生家や親せきから「鯉のぼりまたはショウブ絵（両家の家紋入り）・のぼり・吹流し付」が贈られ、庭先に立て飾った。また、米粉でかしわもちを作り、赤飯を炊き、神棚にお神酒をそなえ、親せきを呼び祝った。
5月8日、お寺で花で飾った小堂の水盤にお釈迦様を安置し、参詣者は小さなヒシャクで甘茶を頭上にそそぎ、また持ち帰って飲みいただく。 子ども達が花を飾り、お参りした。  スジマキ祝い。 5月2日、八十八夜。	男の子の節句。男の子の成長を祝い、庭前にのぼり旗や鯉のぼりを立て、甲冑（よろいかぶと）・武者人形を飾り親族が集まり初節句を祝う。  旧暦の5月5日には、人々の健康と厄除け。玄関や屋根にショウブとヨモギをさし邪気を払う。風呂にもショウブ・ヨモギを入れる。お神酒にショウブの芯を飾り、身体の痛いところへショウブを巻いて健康になるように祈る。

月 日	5月6日	5月中旬	5月下旬～6月上旬
行事名	味噌炊き	おさな開き	おさなぶり
下市田	4月上旬ごろ、となり近所の人達と協力して作業。	田植えの神に、トックリに入れたお神酒・重箱につめてきな粉をふりかけた白飯・たつくり2本・大根干などの煮物をそなえた。	田植えを無事に終えて、田の水取り入れ口に早苗2～3束・清酒・ご飯などをそなえ、田の神に豊作を祈った。 今は機械植えとなり、手植え作業のころの習俗を見ることは少ない。
牛 牧	5月中旬、糶屋商店から大釜や押し機を借り、大豆を煮て味噌の仕込みをした。	豊作を祈る。苗代から苗を取り始めた初日に、神棚に苗を2わ飾り、お神酒をそなえ、豊作を祈願した。	田植えで残した苗2わを神棚へ飾り、お神酒をそなえ、田植えが無事終了したことを祝うとともに豊作を祈った。
上市田		田植えの初日、苗代の水口にある水神様にお神酒とご飯を進げる。 田植えは縁起をかついで、辰の日や酉の日は避けていた。	田植えが終わった日。水神様に白いご飯とお神酒をそなえる。 残った苗をきれいに洗って、家の神棚にそなえた。 <b>【ゆいしごと】</b> となり近所で協力し合う。お互いに手伝いをしあう。
大島山		田植えを始めた日に、田の神へ野菜・豆腐の煮物・白飯・御神酒をそなえた。	田植えが終わった日に、野菜・豆腐と白飯にきな粉をかけ、御神酒とともにそなえた。
出 原		田植えの時、田の水取り入れ口の田の神様(石を置いた)に、簡単なおちそうを作って進げた。稲の苗を2わ神棚にそなえ、豊作を祈った。 田植えは、稲が実らずに立つことを恐れて、田植え期間中に「辰」の日が来ることを避けた。	
吉 田	常会共有の大釜で大豆を煮て、つぶし機で豆をつぶし、米麴を混ぜ(レンガ形)に作り、味噌倉で仕込む。	<b>【木ノ葉焼】</b> 春蚕上がりに五平もちを作って慰労する。 <b>【おさびらき】</b> 田植えを始める日。辰の日は稲が青立ちになると言い、田植えをしない。	田植えの終りと労をねぎらう節目の日とした。この日は神社から「虫よけ札」をいただき、苗床の水田の水口に長径15センチ前後の石を置き、苗(3本くらいを1束)2束を立て、赤飯と尾頭付きを添えて豊作を願った。また、神棚の恵比寿大黒それぞれに苗1束と赤飯、お頭付きをそなえ祝った。水口にススキを立てて先を折り、風よけとする。
山 吹		田植え始めに、各神々に豊作を祈り、ご飯にきな粉をかけて食す。	田植えの終りを祝い、神々に報告、神棚に苗をそなえる。(この苗で七夕の日に硯を洗う。) ご飯にきな粉をかけ、黄金の秋の収穫を祈る。

6月	7月15日ころ		8月1日
キヌヌギ・農休み	祇園祭	土用の丑	かまのふた
<p><b>【農休み】</b> 田植えを労って何日か仕事を休む。常会組で慰労会(料理屋で一席)を行った。若い嫁を里帰りさせた。</p>	津島様の祭り。	夏の栄養補給「うなぎ」や、「う」の付く食べ物(馬肉・牛肉・うどん・瓜・梅干し)を食べる。	極楽の門戸が開き、地獄の釜のふたが開いて多くの仏様が娑婆に出て来る。焼きもちをそなえる。
<p><b>【水神祭り】</b> 部落に流れ込む水路の近くに、水神と彫った石碑があり、水神祭りを行った。祝詞をあげ、直会を行った。</p>	青年衆が青竹とススキ、アオイの花を添え、野菜のほかに新しくできた小麦粉でうどんを作ってそなえた。		
	ススキの良いところを花器にさし、新しくとれた小麦粉でうどんを作り、キュウリ・ナス・ササゲ等をそなえた。	油っこいもの、肉・天ぷら・もち等を食べた。	
			お墓をそうじに行きお墓にふたをしてくる。カボチャを刻んだおやきを焼いて仏様にそなえた。
		今のようにうなぎは手に入らないので、肉や魚を焼いて体に力をつけた意味があった。土用二の丑にも同じように魚を焼き、頭や骨も焼いて食べる。	釜の口があく日として、仏様に天ぷら・やきもちをそなえる。 <b>【新盆のしるし】</b> 新盆の家では印として家紋入りの盆提灯を上座敷の縁側の軒先につるした。お墓のそうじ。
6月1日、キヌヌギ(衣替え)	京都八坂神社の祭礼。ノカンゾウの花等を庭先にそなえる。商店では売り出し等で賑やかであった。	この時期に、土用・虫送りなどの行事があり、ドクダミを風呂に入れた。	地獄の釜のふたが開く日、仏様がお盆に帰り始める。出発する。仏様のお弁当におやきを焼いてそなえる。新盆の家では盆提灯を玄関に出した。 ナヌカビ

月 日	8月7日 (7月7日という地区もある)	8月13日
行事名	七夕	迎え盆 先祖のみたまをまつる行事お正月とならぶ大きな行事。 お盆には仕事もすべて休んで亡くなった先祖の冥福を祈る。
下市田	色紙短冊に、サトイモの葉にある朝つゆで墨をすり、願い事・天の川・ひこ星・おり姫などと筆で書く(今はマジックペン・筆ペンなど)。 短冊に、こより(紙ひも)を通して笹竹の枝に結ぶ。 このごろは保育園・小学校で行い、家庭で行われなくなったという。	箸ほどの大きさの木片を稲わらでたばねた松明に火を灯し、位牌の部屋(仏間)の雨戸障子を開けて、お迎えする。
牛 牧	8月6日早朝に、サトイモの葉にたまっている朝つゆを集める。そのつゆをすずりに入れて墨をする。短冊に天の川・七夕やそれぞれの願い事を書いて竹の小枝に結び付け、庭先に立てた。そのかたわらに台を置き、かごろじを載せてキュウリ・ナス・やうどんをそなえた。	8日くらい前に墓のそうじを行う。 13日に家族そろって墓へ行き、水を墓石にかけ花と線香をそなえ、迎え火をたいた。家に帰り、庭先の砂山に線香をたくさん立て、先祖の霊を供養した。夜うどん、天ぷら、煮物などのごちそうを作って仏様にそなえ、家中で食べた。
上市田	8月6日の早朝、サトイモの畑に行き、サトイモの葉のつゆを取る。子ども達がつゆで墨をすって、赤や青の短冊に天の川・七夕様などの言葉や自分の願い事など筆で書いてカンジヨリを作り、青竹にくくり付けて庭先に飾る。その前にちゃぶ台などを置いて、今年初めて畑からとれたナス・キュウリ・トウモロコシなどの野菜をそなえた。7日の朝、近くの川のふちに置いてきた。七夕に雨が降ると、その年は悪い病気が流行るのでそうならないように願っていた。	13日が近くなると、どこの家でも山や田畑の土手へススキを刈りに出かけ、刈ってきたススキをござに編み、お座敷を作った。お棚に敷いて仏壇から位牌を出してその上に飾る。山からききょうやおみなえし・ぼんばな等をそなえる。お墓もきれいにそうじする。13日の夕方、お墓の仏様を迎えるために、墓地と家の庭で迎え火をたく。仏様は迎え火の煙に乗って家に来る。
大島山	6日朝早く、サトイモの葉のつゆを集めて墨をすり、短冊に字や絵をかくと良いとされた。	お盆のそなえ物は、菓子・果物・野菜・だんご・茶・天ぷら・ごまあえ(くるみあえ)・野の花などをそなえた。 13日はうどんもそなえた。
出 原	短冊に願い事を書いて、竹の枝に結わえ付けた。野菜を箕に入れ、一斗ますをいっしょに置いた。	13日はお墓から仏様を迎え、門口でわらをもやし、迎え火をたいた。仏様に入ってもらうように、風呂のふたはとっておいた。
吉 田	朝、サトイモの葉にたまつゆで墨をすり、短冊に「天の川・お星さま」ほか、願い事を書いて、竹に結び付け庭先に立てて飾った。また、かごろじになわあみを敷いて受け台とし、この時期にとれる野菜(カボチャ・キュウリ・ナス・夕顔)など大きな物を選んでそなえた。 飾った竹は8日の朝、川に流した。	夕方、墓に出向き麦わらで迎え火をたき、引き続き家の門で麦わらで迎え火をたいて招き入れた。家では床の間の前に盆棚を準備し、その上にススキで編んだござを敷いて仏の座とし、先祖の位牌を立て、盆花・果物・天ぷら・ご飯・お水・ナスとキュウリで馬を作り、そなえた。
山 吹	早起きをしてサトイモの葉からつゆを集め、すずりで墨をすり、五色の短冊に願い事や和歌等を書いて、笹竹に飾り玄関先に立てた。夏野菜(トマト・ナス・キュウリ)や果物をそなえ、使ったすずりをおさなぶりにそなえた苗で洗って進げた。 翌朝、飾り物は川へ流した。	13日、仏様を迎える準備。ススキで青柵を編み、仏壇を飾る。位牌・だんご・菓子花・「おちつきのやきもち」・ナスなどをさいころ状に細かくきざんだものをそなえた。このさいころ状のナスなどには、お盆じゅう、ミソハギの枝で水をかけてぬらし続ける。夕方お墓で迎え火をたき、庭先で迎え火をたいて迎える。14日、お盆のごちそう。天ぷら、ササゲのごま和え等をそなえる。

8月15日・8月16日	8月下旬から9月中旬	9月中旬 (旧暦8月15夜)・10月中旬 (旧暦9月13夜)
送り盆	風祭り	お月見 陰暦の十五夜の満月をめぐる
<p>精霊馬 (ナス・キュウリで作る。手綱に見立て、そうめんを掛けることもある) を川の手前に置き、彼岸へお帰りを送る。</p>	<p>氏子役員等によって神事を行い、萩山神社の南参道にある神木の頂辺に御幣を奉る。</p>	<p><b>【おそなえ】</b> ススキの穂 (稲穂に見立て)・だんご・秋の収穫物。 子ども達は「月見おそなえ物いただき」とばかりに、見つからないように頂戴する。子ども達はお月様のお使いと考えられ、おそなえ物は早くなくなったほうが縁起が良いと考えられた。</p>
<p>仏様が乗られるように、ナスとキュウリに前足2本、後ろ足2本をさした。送り火は家とお墓で。</p>		
<p>15日は仏様が家に泊まる最後の日。うどんをそなえ、ナス・キュウリで馬を作り、うどんを手綱代わりにする。 16日、仏様を送る日。ござにそなえ物をくるみ、近くの川に持って行く。庭先では送り火をたき、お墓でもお参りする。</p>		<p>おもちをついてハンギレにいれ、その上に大根を2本のせて、二階南側のお月さんの見えるひさしに進げる。</p>
<p><b>【そなえる物】</b> 14日…さとうもち・ぼたもち・粥・すし 15日…カボチャめし・うどん 16日…ナネシ</p>		<p>8月15夜をヤサイノツキミ、13夜をモチノツキミと言って、もちと大根をそなえた。</p>
<p>16日の朝、ススキで編んだござにおそなえ品を包み、祖先が無事に帰れるようにうどんを乗せたナス・キュウリの馬を添えて墓へ持参し線香を立て送った。そなえ物は大川へ流した。</p>	<p>暦の上で210日、農作物の無事な収穫を願い、風の神様を神社で祭る。吉田神社から風の神様 (お札) が配られる。</p>	<p>収穫の無事を感謝。 丸い大きめのもちを作り、おぼんに大根の葉を敷いてもちを乗せ、馬小屋の屋根に飾った。</p>
<p>15日、仏様のおみやげの準備。サトイモの葉の上にくるみ、いが栗、さんしょの枝等 (痛い物、途中のお守り)。ナスの牛を作り、手綱はうどんをゆでてかける。 16日、送り火をたく。</p>	<p>個々ではやらない。収穫を控えて風が吹かないように神社のご神木に御幣を揚げて祝詞をあげる。</p>	<p>ススキ等秋の花々を進げて、箕 (竹・藤) へ、サトイモ・枝豆をそなえる (その年の出来具合がわかる)。 もちをつき、鏡もちと大根2本を月にそなえる。おひつへ大根を葉付きのまま立て、その上におそなえもちをのせ、屋根の上へそなえる。</p>

月 日	9月の秋分の日前後	10月下旬	11月1日・11月末
行事名	秋の彼岸 仏様の法要	こぼしあげ 稲あげ、脱穀を終了し祝う	恵比寿講・月遅れの恵比寿様のお立
下市田	春と同じように先祖供養。 おそなえは、おはぎ(萩の花、黄色は秋田の穂とも)	新米でぼたもち。 一斗ますへ南天の葉をしぎ、その上に大き目に作った7個のもち(きな粉・あずき)をのせ、土蔵にそなえる。	
牛 牧	春彼岸と同様に、天ぷら饅頭とおはぎを作り、仏前にそなえた。家族中で墓参りも行った。		
上市田		稲作の収穫に感謝して、おはぎを作り、神棚・仏様にそなえる。家族でごちそうをいただく。	農家は一年の収穫に感謝し、商人は商売繁盛を願い、大安売りを実施した。
大島山			三宝荒神・かまどの神が留守番をしていると言われた。
出 原	春の彼岸と同じ。		
吉 田	祖先の霊を供養する日。 床の間にお寺様のかけじくを飾り、祖先の位牌を置き、花・天ぷら・菓子・ご飯等をそなえ線香を立て、供養した。	稲こきが終わったことで、ぼたもちを作りおそなえする。	神々が出雲へ旅立つ。小豆のご飯のおにぎりをあつらえる(神棚におそなえする。)農家は秋の収穫に安堵し喜び、商人は恵比寿様に商売繁盛を願い、衣食住に関わる必需品を格安に提供し、お互いの幸せを願った。
山 吹	秋分の日前後7日間がお彼岸。お墓参り、おはぎ等をそなえてご先祖・仏様の法要を行う。	なべふた・おひつのふたへ、ぼたもち(あん・きな粉をまぶす)をのせ、稲運びをした牛にも食べさせ、収穫を祝う。	神様が出雲大社へ出発する日。赤飯のおにぎり(丸く握る)と、一升ますと五合ます(ますます半升)へ家中のお金を入れ、神棚へそなえてたくさんの収穫や良縁を願った。

11月中旬	11月23日	12月21日ごろ	12月31日ごろ
七五三 <small>子どもの成長を祝い、 神に祈念する</small>	収穫祝い（新嘗祭）	冬至（一陽来復）・病気の予防	大 祓
萩山神社祭事。 お守り・千歳飴をいただく。 （7歳女の子・5歳男の子・3歳男の子と女の子）		【カボチャ】 色付き野菜で、不足がちな栄養をとる。  【柚子湯】 体を温め、風邪の予防など。	12月の終わりに、神社で役員が行っている。
男子は5歳、女子は3歳と7歳を祝う。牛牧神社へお参りし、家では赤飯を炊いた。		家中の者が健康で暮らせるよう、カボチャを煮て食べた。	12月の終わりに、神社で役員が行っている。
	ゆい仲間・近くの親せきが、各家順番で五平もち等を作り、一杯飲んで豊作と健康であったことに感謝し、楽しい一時を過ごした。		12月の終わりに、神社で役員が行っている。
			12月31日、各家に配られた人形（ひとがた）を使って、祓い清めている。
			12月の終わりに、神社で役員が行っている。
	氏神（吉田神社）に氏子代表者が今年収穫された「新米」をおそなえし、五穀豊穡を感謝した。	無病息災。 風邪をひかない様にカボチャを食べる。	6月と12月に、神社で役員が行っている。
	五平もち・野菜の煮物（七色…大根・ニンジン・ゴボウ・こんにゃく・昆布・豆腐・サトイモ等）・しらあえ・その他ごちそうをたくさん。家内中と手伝ってくれた方等を招いてお祝いする。神社では新嘗祭が行われる。		12月の終わりに、神社の掃除といっしょに行っている。

## あとがき

年中行事とは、季節の移ろいの中で人々が日常生活を繰り返し営むなかで培われてきた行事です。

しかし、近年、私たちの生活様式の変化や社会的状況の変化の中で、その意義が薄れてしまったり、行事そのものが行われなくなったりしてきているのが現状です。

こうした中で、資料館調査委員会では各地区の年中行事について、昭和60年代前半に調査した資料も参考にして、高森町各地区で行われている行事、また、かつて行われていた年中行事についても記録にとどめ、ふるさと高森の未来を背負って立つ子どもたちに伝えていくことが急務であると考え、平成26年度から調査研究に取り組みました。

ここに取り上げた年中行事は、各地区の中でも違いがあったり、各家庭においても異なっていたりするのが実情で、今回の調査で全て網羅できたわけではありません。お気づきの点等、お教えいただければ幸甚に存じます。

調査研究に関わり本書作成に携わっていただいた資料館調査委員の皆さん、また、調査研究にご協力いただいたすべての皆さんに心より御礼申し上げます。有難うございました。

高森町歴史民俗資料館「時の駅」

主事 芦部 公一

### ○平成26～29年度資料館調査委員

- (山 吹) 塩澤 孝・橋都 洋治
- (吉 田) 中塚 悟・中塚 美弘
- (下市田) 片桐 猛・唐木 孝治・中村 忠敬
- (上市田) 下平 清志
- (牛 牧) 加藤 清
- (大島山) 本島 義文
- (出 原) 畑中 定喜

### ○イラスト作成：今井 啓（飯田市上郷）

### 〈参考文献〉

- 野本 寛一 2013『日本の心を伝える年中行事辞典』（榎岩波書店）
- 長野県史刊行会 1988『長野県史 民俗編 第二卷（二）南信地方 仕事と行事』
- 熊谷 元一 2008『信州・昭和の原風景 熊谷元一白寿記念写真集』一草舎出版
- 高森百年の写真史編纂委員会 1989『高森百年の写真史』高森町歴史民俗資料館
- 飯田市教育委員会 1980『ふるさと飯田の民俗 一社会科資料一』
- 飯田市生活改善グループ連絡協議会 2006『飯田の風土料理読本』
- 高森町公民館上市田分館 2007『区民が作った「上市田いろはカルタ」解説書』
- 秋廣 昌人 2007『簡単な正月飾りなどの作り方』
- 中川村年中行事編纂委員会 2017『ちょっと昔の今に続く中川村の年中行事』中川村公民館  
〈協力〉  
飯島陣屋

『子どもたちに伝えたい  
高森町の年中行事』

---

発行日 平成30年3月31日

発行 高森町歴史民俗資料館「時の駅」  
長野県下伊那郡高森町下市田2243  
電話 0265-35-7083

印刷 龍共印刷株式会社  
長野県飯田市上郷黒田121  
電話 0265-22-5353